埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 101 集

花 小 路 遺 跡

2008.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第101集

花小路遺跡

2008.3

深谷市教育委員会

巻頭図版 1

調査区遠景

巻頭図版２

調査区全景

巻頭図版３

第１号掘立柱建物跡

巻頭図版４

第１号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡Ｐ３

第１号溝

第５号掘立柱建物跡Ｐ２出土三彩（約４倍）

序

このたび、深谷市教育委員会では、「花小路遺跡」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。この遺跡は今回が初めての調査ですが、庇を持つ建物跡をはじめ多くの建物跡が確認されるなど、大きな成果が得られました。

遺跡のあります大沼地区は、その名のとおり湿地が多く、遺跡も少ないと思われました。しかし、この地が古くから人々によって開発されていたことは大きな驚きでした。現地説明会にも多数の方が見学に訪れ、地域の方々の関心の高さが窺えます。

現在、深谷市には縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

最後に、今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして序にかえます。

平成 20 年３月

深谷市教育委員会
教育長　　猪　野　幸　男

例　　言

１．本書は、埼玉県深谷市西大沼字花小路４４－１他における児童養護施設建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用については事業者である社会福祉法人彩の国ふかや福祉会が負担した。

３．発掘調査期間は、平成 18 年４月６日～５月 31 日である。

４．発掘調査は知久裕昭の管理のもと、永井智教（現鳩山町教育委員会）が担当した。整理作業は永井・知久が担当し、報告書の執筆は知久がおこなった。

５．遺跡の基準点測量及び遺構測量は、技研測量設計株式会社に委託した。

６．放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

７．柱材の樹種同定について、早稲田大学の鈴木伸哉氏、森林総合研究所の能城修一氏より、玉稿を賜った。

８．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

９．発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
青木克尚　　池田敏宏　　鈴木徳雄　　竹野谷俊夫　　鳥羽政之　　松田　哲　　宮本直樹
松村　篤　　山中敏史　　（敬称略）

凡　　例

１．遺跡原点は、国家方眼座標Ｘ＝ 22900.000、Ｙ＝ -50280.000 である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

２．遺物観察表の記載は、以下のとおりである。
・計測値の単位は cm である。
・器径、器高で（ ）を付したものは推定値を表す。
・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。
Ａ…白色粒子、Ｂ…赤色粒子、Ｃ…黒色粒子、Ｄ…石英、Ｅ…角閃石、Ｆ…片岩
Ｇ…白色針状物質、Ｈ…砂礫、Ｉ…雲母

３．遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次のとおりである。
掘立柱建物跡…ＳＢ、竪穴建物跡…ＳＪ、土坑…ＳＫ、溝…ＳＤ、溜井状遺構…ＳＸ

４．遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

発掘調査の組織

発掘調査（平成 18 年度）

	教 育 長	猪野　幸男
	教育次長	古川　国康
	次　　長	中村　信雄
事務局　深谷市教育委員会生涯学習課	課　　長	澤出　晃越
	主幹兼課長補佐	武井　　茂
	課長補佐	大谷　住雄
	文化財保護係長	古池　晋禄
	主　　任	畦元　直大
	主　　任	荻野　直美
	主　　任	知久　裕昭
	臨時職員	永井　智教
	臨時職員	吉野　智貴

報告書刊行（平成 19 年度）

調査主体者　　深谷市教育委員会	教 育 長	猪野　幸男
	教育次長	石田　文雄
	次　　長	中村　信雄
事務局　深谷市教育委員会生涯学習課	課　　長	澤出　晃越
	主幹兼課長補佐	武井　　茂
	文化財保護係長	古池　晋禄
	主　　査	森下昌市郎
	主　　査	鳥羽　政之
	主　　査	高村　敏則
	主　　任	荻野　直美
	主　　任	知久　裕昭
	主 事 補	幾島　　審
	臨時職員	栗原貴世実

調査参加者

伊藤　　昌　　市川喜和子　　大木　良子　　大澤　大美　　笠原　淑江　　栗原　慶多　　小室　翔平
清水　徹也　　関口由美子　　滝田　悦子　　根岸　紀次　　浜野　光子　　平野　哲也　　丸山　和枝
横山　明美　　除村　敦子　　吉野九の枝　　吉野真由美　　吉野みゆき

目　　次

序
例言
凡例
発掘調査の組織
Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査の経過 …… 1
Ⅱ　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 6
　1　概要 …… 6
　2　旧石器～弥生時代 …… 6
　3　平安時代以降 …… 7
　　a　掘立柱建物跡 …… 7
　　b　竪穴建物跡 …… 13
　　c　土坑 …… 19
　　d　火葬墓 …… 23
　　e　溝 …… 24
　　f　溜井状遺構 …… 31
Ⅳ　調査のまとめ …… 33
付編１ …… 35
付編２ …… 39
報告書抄録

挿図目次

第１図　花小路遺跡及び周辺の遺跡分布図 …… ３
第２図　花小路遺跡の位置と発掘調査区 …… ４
第３図　花小路遺跡調査区全体測量図 …… ５
第４図　旧石器～弥生時代の遺物 …… ６
第５図　第１号掘立柱建物跡 …… ７
第６図　第１号掘立柱建物跡断面図（１） …… ８
第７図　第１号掘立柱建物跡断面図（２） …… ９
第８図　第２号掘立柱建物跡 …… 10
第９図　第２号掘立柱建物跡断面図 …… 11
第10図　第３号掘立柱建物跡 …… 12
第11図　第３号掘立柱建物跡断面図 …… 13
第12図　第４号掘立柱建物跡 …… 14
第13図　第５号掘立柱建物跡 …… 15
第14図　掘立柱建物跡出土遺物 …… 16
第15図　第１号竪穴建物跡 …… 17
第16図　第２号竪穴建物跡 …… 18
第17図　第３号竪穴建物跡 …… 19
第18図　第４号竪穴建物跡 …… 20
第19図　第５号竪穴建物跡 …… 20
第20図　第６号竪穴建物跡 …… 21
第21図　竪穴建物跡出土遺物 …… 22
第22図　土坑・火葬墓 …… 24
第23図　第１号溝 …… 25
第24図　第２・３号溝 …… 27
第25図　第４号溝 …… 29
第26図　第５号溝 …… 30
第27図　第１号溜井状遺構 …… 30
第28図　土坑・火葬墓・溝出土遺物 …… 31
第29図　調査区出土遺物 …… 32

表 目 次

第１表　花小路遺跡及び周辺の遺跡一覧表 …… ３
第２表　掘立柱建物跡出土遺物観察表 …… 17
第３表　竪穴建物跡出土遺物観察表 …… 23
第４表　土坑・火葬墓・溝出土遺物観察表 …… 30
第５表　調査区出土遺物観察表 …… 32

図版目次

巻頭図版１　調査区遠景
巻頭図版２　調査区全景
巻頭図版３　第１号掘立柱建物跡
巻頭図版４　第１号掘立柱建物跡　第５号掘立柱建物跡Ｐ３　第１号溝　第５号掘立柱建物跡Ｐ２出土三彩
図版１　第１号掘立柱建物跡　第２号掘立柱建物跡　第３号掘立柱建物跡
図版２　第５号掘立柱建物跡　第５号掘立柱建物跡Ｐ３　第１・３号溝
図版３　第１号掘立柱建物跡　第１号掘立柱建物跡Ｐ１　第１号掘立柱建物跡Ｐ２　第１号掘立柱建物跡Ｐ３
第１号掘立柱建物跡Ｐ４　第１号掘立柱建物跡Ｐ７　第１号掘立柱建物跡Ｐ８　第２号掘立柱建物跡
図版４　第３号掘立柱建物跡Ｐ４　第３号掘立柱建物跡Ｐ５　第３号掘立柱建物跡Ｐ６　第４号掘立柱建物跡
第５号掘立柱建物跡Ｐ１　第５号掘立柱建物跡Ｐ２　第５号掘立柱建物跡Ｐ３柱根　第１号竪穴建物跡
図版５　第２号竪穴建物跡　第３号竪穴建物跡　第４号竪穴建物跡　第５号竪穴建物跡　第６号竪穴建物跡（1）
第６号竪穴建物跡（2）　第６号竪穴建物跡カマド　第６号竪穴建物跡、第３号溝
図版６　第１号溝（1）　第１号溝（2）　第２号溝　第３号溝　第２・３号溝　第１号溜井状遺構（1）
第１号溜井状遺構（2）　第２号土坑
図版７　第３・４号土坑　第５号土坑　第１号火葬墓　調査風景（1）　調査風景（2）　調査風景（3）
第４図１　第４図２　第４図６
図版８　縄文・弥生土器　第 14 図３（ＳＢ１）　第 14 図４（ＳＢ１）　第 14 図５（ＳＢ１）
第 14 図９（ＳＢ１）　第 14 図 16（ＳＢ４）　第 14 図 17（ＳＢ５）　第 21 図８（ＳＪ４）
第 21 図２（ＳＪ２）　第 29 図１（調査区）　第 28 図２（１号火葬墓）　第 29 図３（調査区）
ＳＢ５Ｐ３柱根
図版９　第１号掘立柱建物跡出土遺物　第２･４号掘立柱建物跡出土遺物　第２･４号竪穴建物跡出土遺物
第５・６号竪穴建物跡出土遺物　土坑・溝出土遺物　調査区出土遺物
付編２図版１　柱材の顕微鏡写真

Ⅰ　発掘調査に至る経過

１　発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年１月１日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58km²、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、深谷ネギの産地としても有名である。歴史的にも、後期旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良・平安時代、また百済木遺跡で豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残される。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

花小路遺跡は、ＪＲ深谷駅より北西へ約1.7km、櫛挽台地先端部に立地する。標高は約35ｍ、遺跡の範囲は約24,000㎡と推定される。大沼という地名が示す通り、周辺には湿地が点在していた可能性が考えられるが、大沼地区の縁辺には遺物の散布によって遺跡が確認されている。そのため、深谷市教育委員会では、花小路遺跡周辺で事前調査等を行ってきた。

平成17年９月、花小路遺跡地内の深谷市西大沼字花小路44-1、-4、-5で児童養護施設建設工事の実施が明らかとなった。深谷市教育委員会は工事主体者である社会福祉法人彩の国ふかや福祉会との協議を経て、平成18年１月16日に確認調査を実施した。調査の結果、土坑やピット等が多数確認された。この結果を踏まえ、発掘調査の実施について、市教育委員会と社会福祉法人彩の国ふかや福祉会とで協議を行い、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成18年４月13日付深教生発第42号）を提出し、準備に入った。

２　発掘調査の経過

４月６日㈭　器材搬入。表土剥ぎ。遺構確認。
４月７日㈮　表土剥ぎ。遺構確認。
４月10日㈪～11日㈫　表土剥ぎ。遺構確認。遺構掘り下げ。
４月12日㈬　雨天中止。
４月13日㈭～19日㈬　遺構確認。遺構掘り下げ。
４月20日㈭　雨天中止。
４月21日㈮　遺構確認。遺構掘り下げ。
４月24日㈪～５月１日㈪　遺構掘り下げ。
５月２日㈫　雨天中止。
５月８日㈪～９日㈫　清掃。遺構掘り下げ。
５月10日㈬　清掃。遺構掘り下げ。空中写真撮影。測量。遺物取り上げ。
５月11日㈭～12日㈮　遺構掘り下げ。測量。
５月14日㈰　現地説明会。
５月15日㈪～17日㈬　遺構掘り下げ。
５月18日㈭　雨天中止。
５月19日㈮　遺構掘り下げ。測量。
５月22日㈪～23日㈫　測量。遺構掘り下げ。
５月24日㈬　測量。
５月25日㈭　遺構掘り下げ。測量。
５月26日㈮　遺構掘り下げ。写真撮影。
５月29日㈪～30日㈫　測量。埋め戻し。
５月31日㈬　埋め戻し。器材撤収。

雨が多かったこともあり、地下水位が高く、調査は困難を伴った。しかし、平安時代の集落跡が確認され、また旧深谷市域では２点目の旧石器が出土するなど大きな成果が挙げられた。今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた社会福祉法人彩の国ふかや福祉会をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

II　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るＪＲ高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼＪＲ高崎線沿いの崖線で比高差５～10ｍをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びていて、比高差２～５ｍをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50ｍ、寄居面が32～36ｍ、妻沼低地が30～31ｍである。櫛挽面は標高70ｍ付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、先端部には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地先端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一角に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷などにより、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡等がある。旧深谷市域では旧石器はほとんど出土しておらず、今回の花小路遺跡で出土したものが東方の幡羅遺跡に次いで２点目である。

縄文時代では、台地の先端部に当たる東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。また、上野台の小台遺跡からは、早期押型文土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。上野台の割山遺跡からも、諸磯ａ式土器が多く出土する。

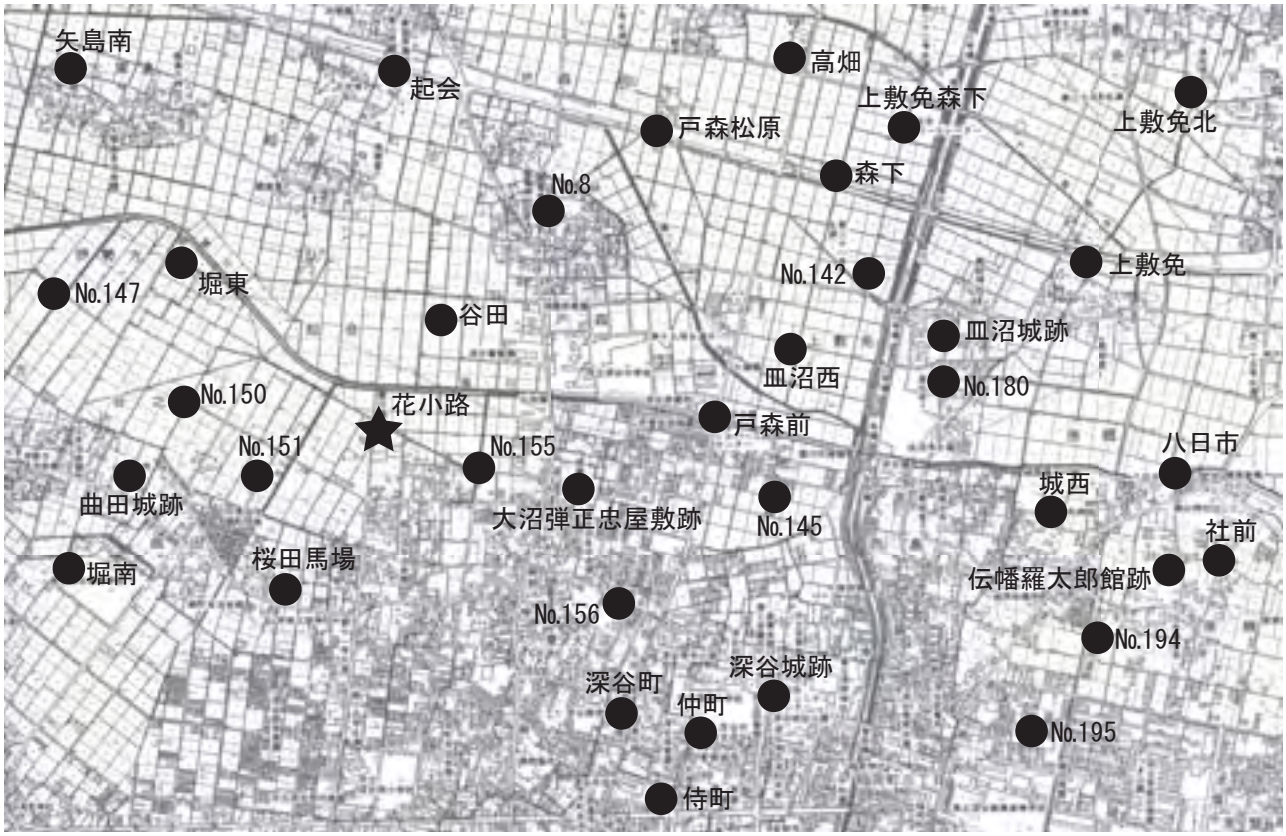
縄文中期、特に後半になると遺跡数やその規模は増大する。小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土坑群が展開する。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

縄文後・晩期になると、生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壷が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、若干時期が下る住居跡が同一の自然堤防上に確認されている。岡の四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、幾つかの古墳群を形成する。代表的なものに、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群がある。

７世紀頃には上敷免遺跡等それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡に近い位置の集落規模が拡大する。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考



第１図　花小路遺跡及び周辺の遺跡分布図（1/20,000）

遺跡名称	時代	遺跡名称	時代
花小路	古墳後期	深谷城跡	古墳前期、平安、中世、近世
矢島南	古墳後期～平安	仲町	縄文後期
起会	古墳中・後期～平安	侍町	中世
堀東	縄文中期・後期、弥生前期・中期、平安	城西	縄文前期・中期、古墳後期～平安
谷田	平安	八日市	縄文後期、古墳後期～平安、中世
曲田城跡	中世	伝幡羅太郎館跡	中世
堀南	縄文前期、古墳前期・後期～平安	社前	縄文前期・中期、古墳後期～平安
桜田馬場	中世	No.8	古墳後期～平安
高畑	弥生後期、古墳後期～平安	No.142	古墳後期～平安
戸森松原	古墳前・中期、奈良、平安	No.145	古墳後期～平安
上敷免森下	弥生中期、古墳後期	No.147	古墳後期～平安
森下	奈良、平安	No.150	縄文後期、古墳後期～平安
上敷免北	縄文後期・晩期、古墳後期～平安	No.151	古墳後期～平安
上敷免	縄文中～晩期、弥生、古墳後期～平安	No.155	縄文中期・後期、古墳後期～平安
皿沼城跡	中世	No.156	縄文、古墳後期～平安
皿沼西	縄文後期、弥生、古墳前・中期、平安	No.180	弥生中期、古墳後期～平安
戸森前	古墳前期・中期・後期、奈良、平安	No.194	古墳後期
大沼弾正忠屋敷跡	中世	No.195	古墳後期
深谷町	縄文中期・後期、古墳中期		

第１表　花小路遺跡及び周辺の遺跡一覧表

第２図　花小路遺跡の位置と発掘調査区（1/2,500）

えられる。榛沢郡の郡家正倉跡は岡の中宿遺跡で発見されている。幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、正倉や館等の遺構がこれまでに確認され、更にその範囲、内容を確認するための調査が継続中である。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代には、深谷城跡、堀南遺跡、花小路遺跡等、台地の先端部に新たに集落が営まれるようになる。これらの集落は、榛沢郡と幡羅郡を結ぶ水路の可能性が指摘される福川の流域に位置する。特に花小路遺跡は流路に近接しており、河川交通に関わっている可能性が高い。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている人見館跡である。それに近接する吹張遺跡でも、館等の施設跡が検出されている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、当初庁鼻和城に居を構えたと言われるが、５代目房憲の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約１km には、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約３km の台地の先端部には東方城跡がある。周辺には他に家臣の館が分布していたと思われ、南方約 1.8km には、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約 2.8km には、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承などが一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。仙元山南麓の押切遺跡西隣に位置する昌福寺は、房憲が創建したとされる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。

第３図　花小路遺跡調査区全体測量図

Ⅲ　遺構と遺物

1　概要

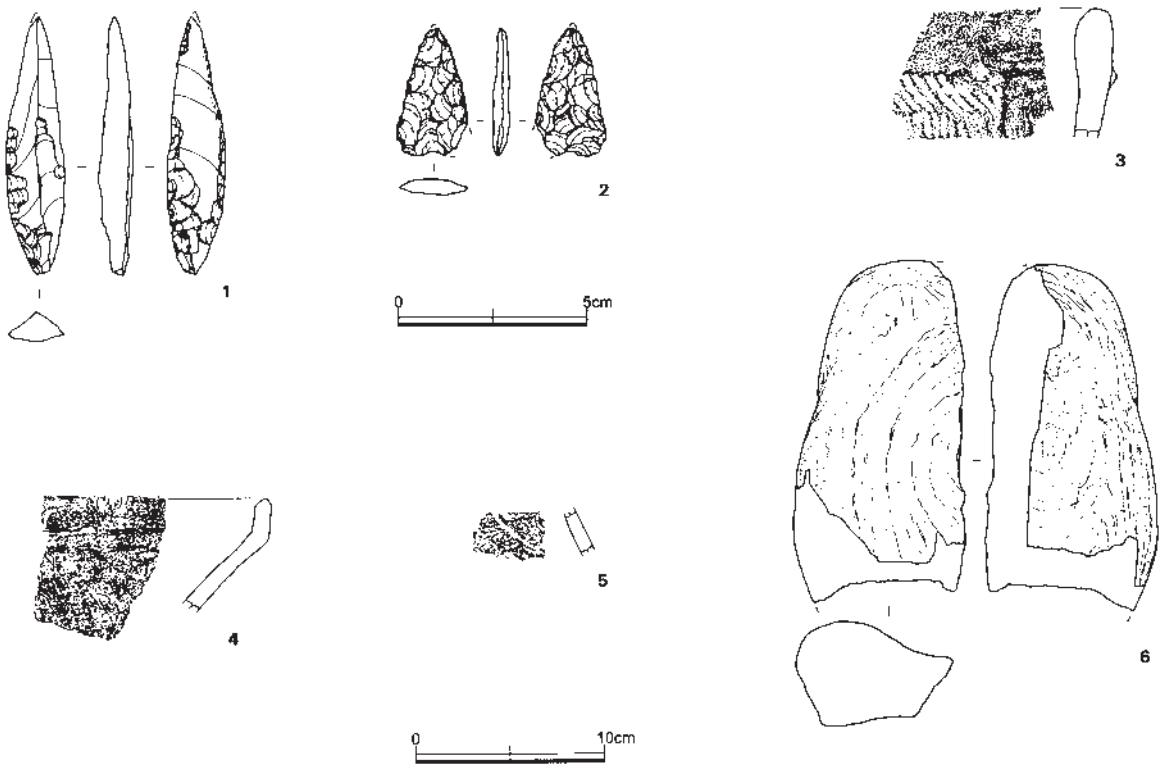
検出された遺構は、掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡６棟、土坑９基、火葬墓１基、溝５条、溜井状遺構１条等である。湧水点は浅いため、土坑の中には井戸跡も含まれる可能性がある。

遺跡の時期は、主に平安時代～中世である。中でも平安時代の遺構は充実しており、特に庇を持つ第１号掘立柱建物跡が注目される。また、第４号掘立柱建物跡からは炭化米が出土しており、有力者の居宅であった可能性も考えられる。

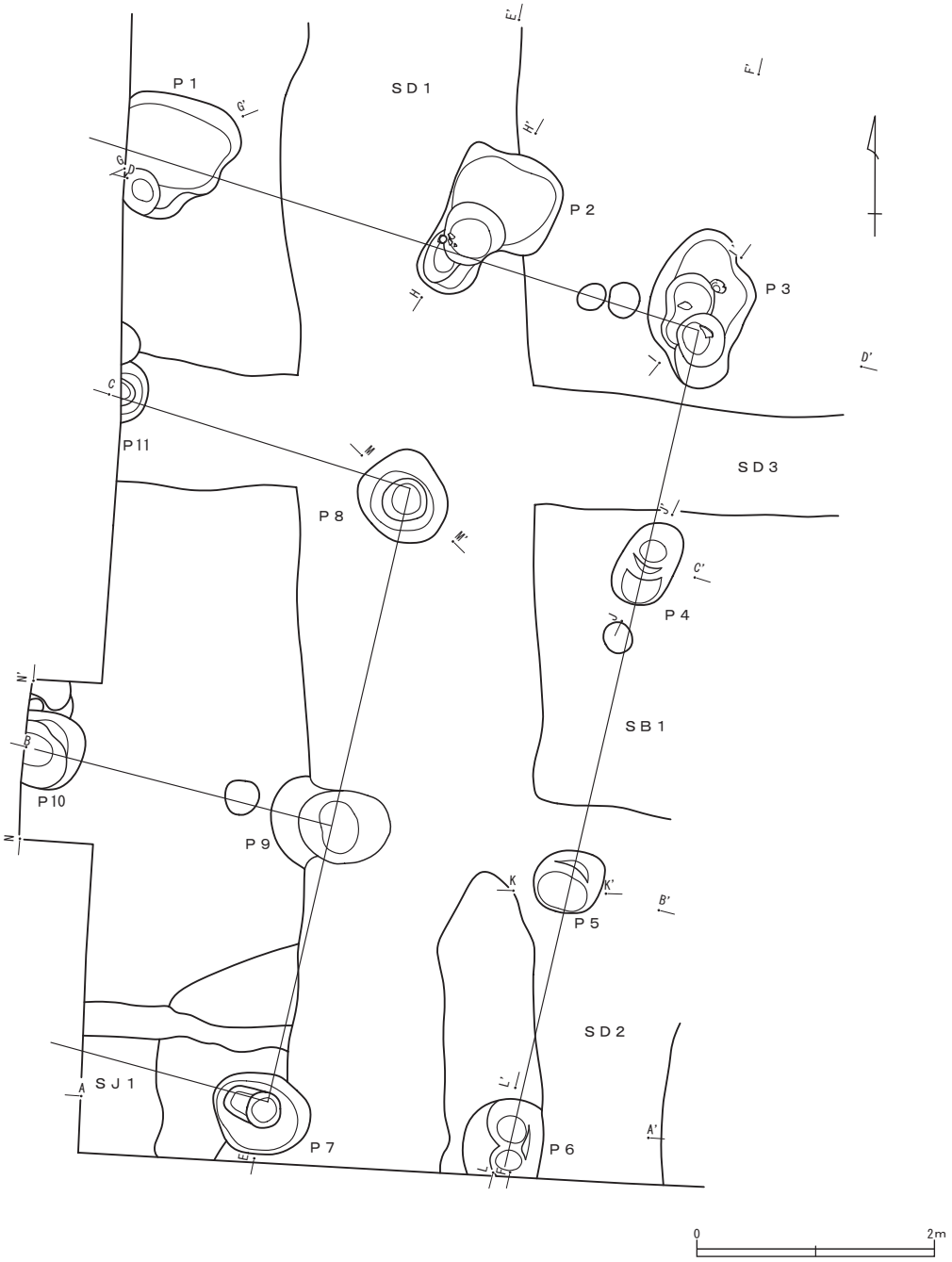
ローム層までは深さ約50cmであり、遺構の大半はその面で確認された。しかし、ローム上に黒褐色土層が広く認められ、遺構はその上面でも確認が可能であることが調査により明らかとなった。

2　旧石器～弥生時代

旧石器～弥生時代の遺物は、第４図に示した。１はナイフ形石器である。第７号土坑の壁面に刺さった状態で出土した。頁岩製で、先端部をわずかに欠く。長さ6.8cm、幅1.5cm、厚さ0.8cmを測る。２は石鏃である。第１号溝から出土した。凝灰岩製で、先端部及び基部の一部を欠く。長さ3.3cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測る。３・４は縄文土器である。３は口縁下に微隆起線が巡り、垂下する微隆起線間にＲＬの縄文が施される。４は浅鉢型土器である。第３号掘立柱建物跡Ｐ４から出土した。口縁部は屈曲する。５は弥生土器の壷である。沈線間にＬＲの縄文が施される。６は石皿である。片岩製で、両面とも使用されている。厚さ5.5cmを測る。



第４図　旧石器・縄文・弥生時代の遺物



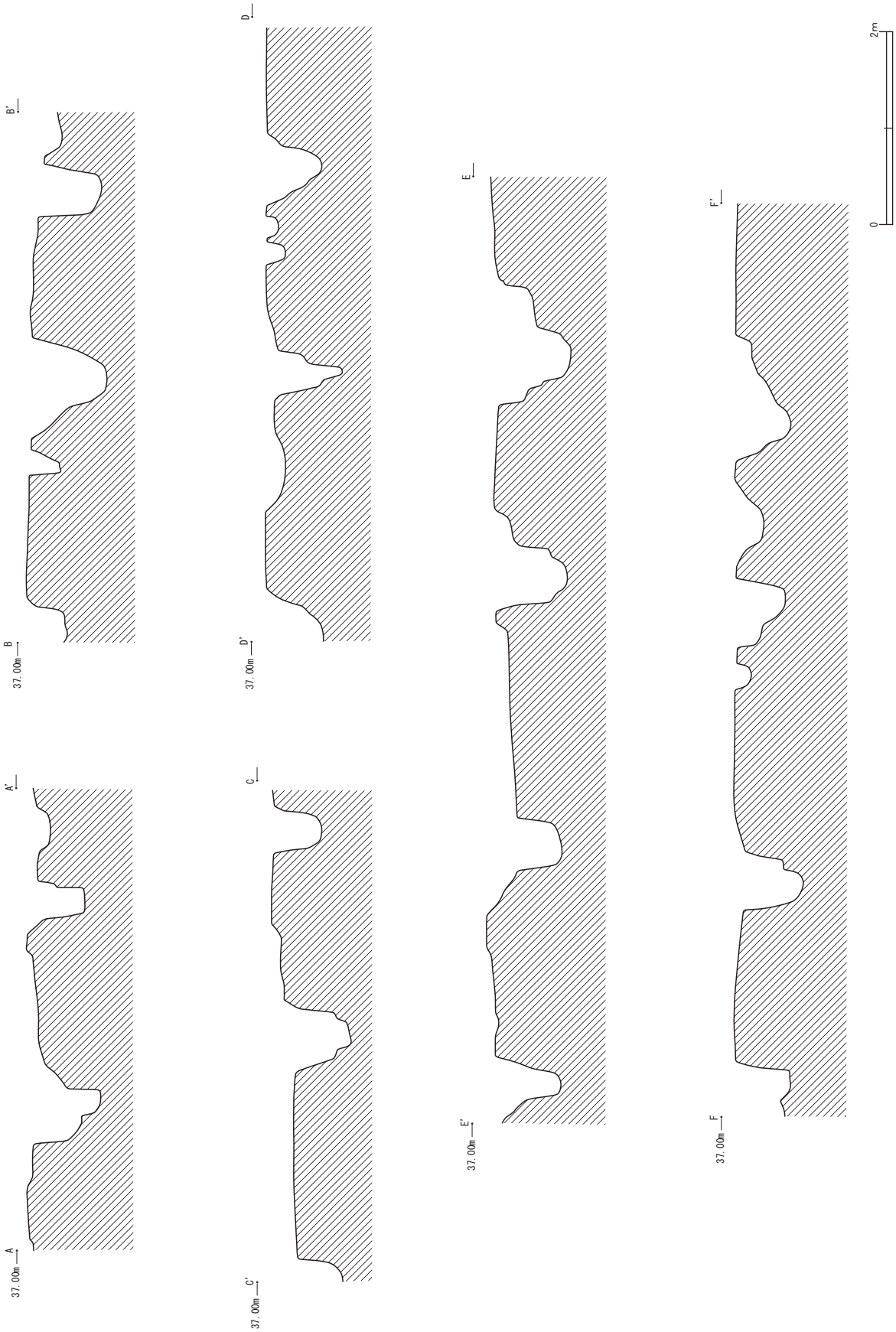
第５図　第１号掘立柱建物跡

３　平安時代以降

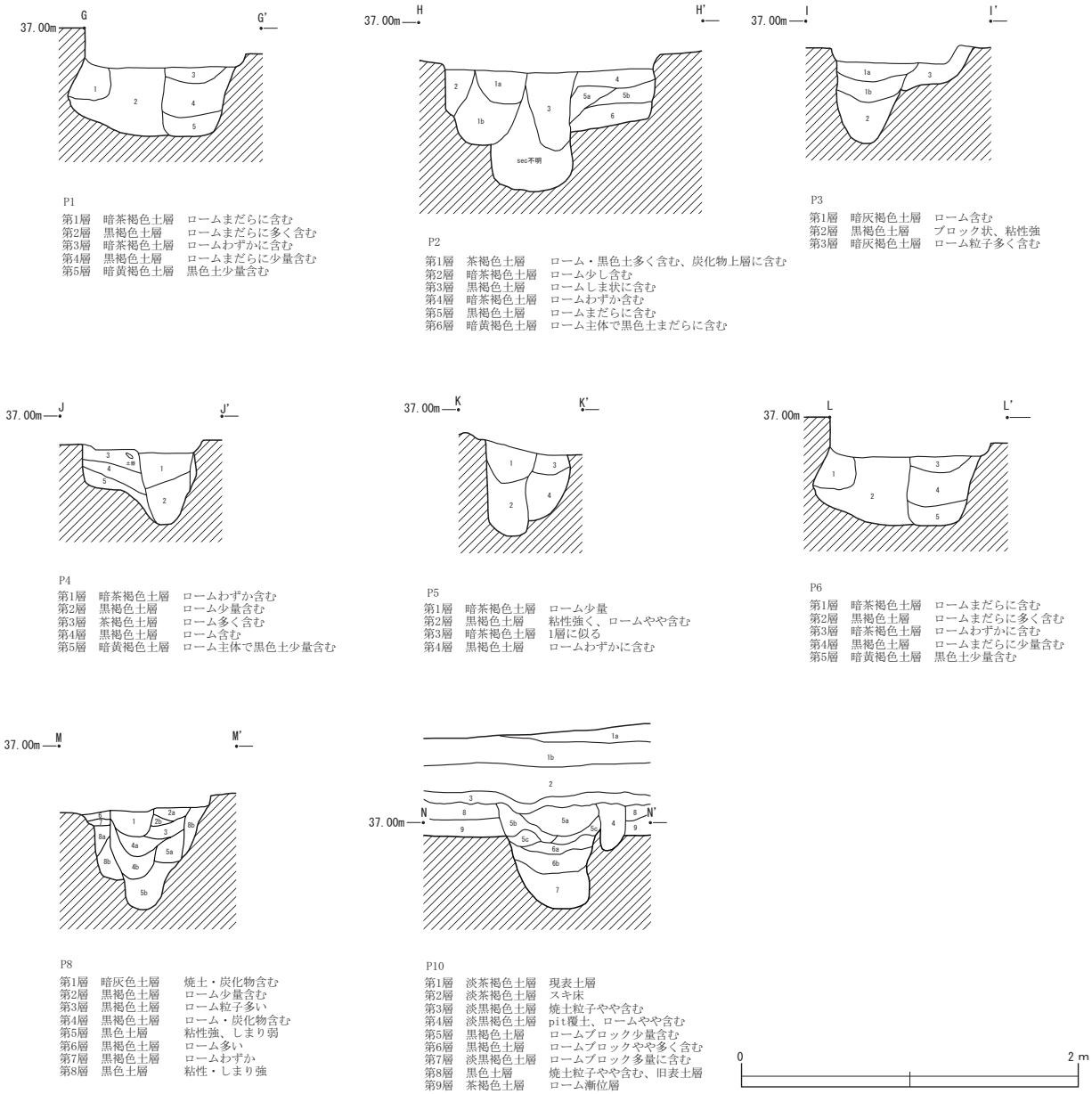
a　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第５～７図、第14図１～９、第２表）

調査区南西隅に位置し、第１～３号溝に切られ、第１号竪穴建物跡と重複する。建物の西部と南部は調査区外にあり、その構造は明確ではない。しかし、柱穴の配置や規模から、庇付きの建物であることは確実である。身舎は南北２間程度（5.3 m程度）、東西２～３間の可能性が考えられる。その場合、Ｐ 10 は床束となろうか。柱間は南北軸が北から 2.9 m－ 2.4 m、東西軸が 2.7 mで、庇の出は北に２m、東に 2.05 mを測る。



第６図　第１号掘立柱建物跡断面図（１）



第７図　第１号掘立柱建物跡断面図（２）

主軸方位はＮ－13°－Ｅである。

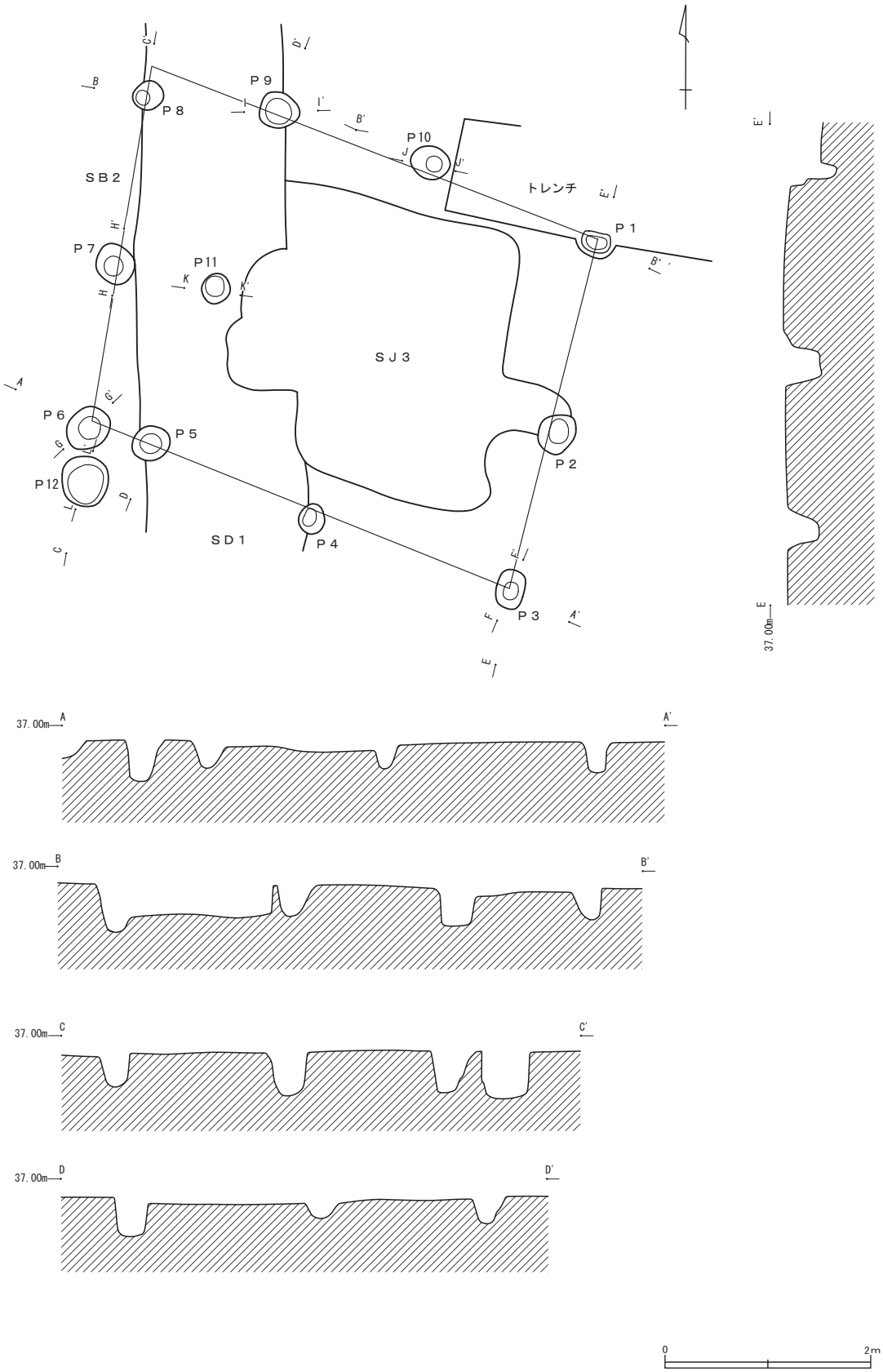
柱穴の土層断面から、ほぼ同じ位置で１回建て替えられていると考えられる。柱の掘方は直径50～90cmの円形を基本とし、確認面からの深さは50～80cmを測る。柱穴内から木片が採取された。

図示できた遺物は、第14図１～９である。１～８は須恵器で、１・２は坏、３・４は高台坏、５は皿、６～８は甕である。９は土師器台付甕である。１はＰ５、２はＰ９、３・７はＰ２、４はＰ６、５・６・８はＰ３、９はＰ１出土である。

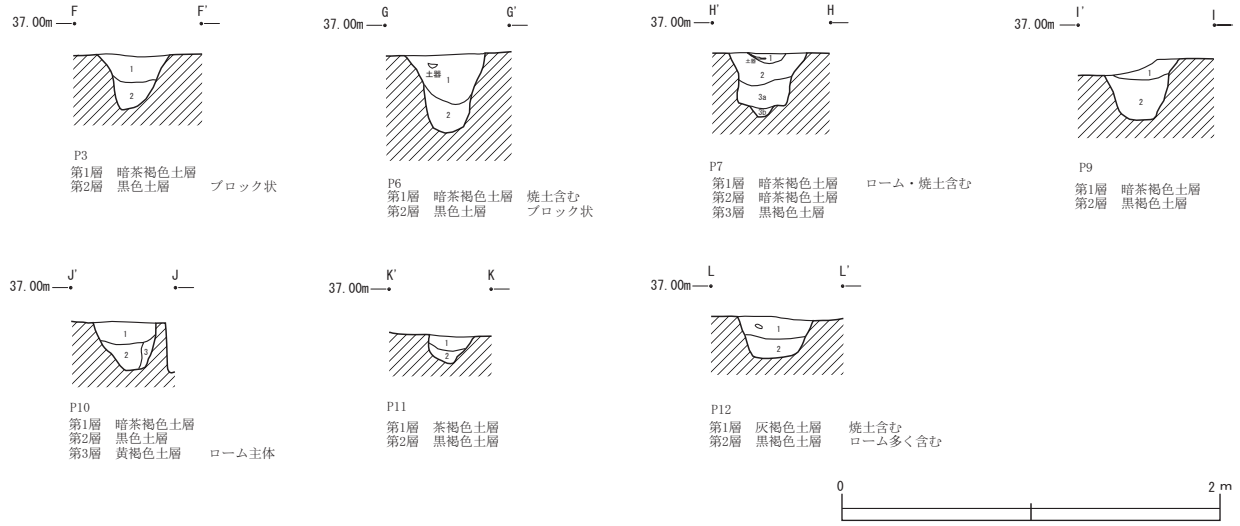
遺構の時期は９世紀後半と推定される。

第２号掘立柱建物跡（第８図、第14図10、第２表）

調査区中央部に位置し、第３号竪穴建物跡のカマド先端と重複し、第１号溝に切られる。側柱式掘立柱建物で、桁行３間（4.4ｍ）×梁行２間（3.5ｍ）である。平面形態は歪んでいる。柱間は桁行北列が西から1.3ｍ－1.6ｍ－1.7ｍ、南列が西から0.6ｍ－1.7ｍ－



第８図　第２号掘立柱建物跡



第９図　第２号掘立柱建物跡断面図

2.1 m、梁行西列が北から 1.6 m－ 1.5 m、東列が北から 1.9 m－ 1.6 mを測る。主軸方位はN－ 70°－Wである。カマド先端部と重複するものの、位置関係から、第３号竪穴建物跡と関連する可能性も考えられる。

柱の掘方は直径 30 ～ 40cm の円形を基本とし、確認面からの深さは 15 ～ 40cm を測る。柱痕跡等は確認されなかった。

図示できた遺物は、第 14 図 10 の土師器坏である。Ｐ６から出土した。

根拠となる遺物はわずかであるが、遺構の時期は９世紀中葉～後半頃と推定される。

第３号掘立柱建物跡（第 10 ～ 11 図）

調査区北部に位置し、倒木痕を切る。側柱式掘立柱建物で、桁行２間（4.5 m）×梁行２間（4.25 ～ 4.5 m）である。平面形態はやや歪んでいる。柱間は桁行西列が北から 2.1 m－ 2.4 m、東列が北から 2.4 m－ 2.1 m、梁行北列が西から 2.1 m－ 2.4 m、南列が西から 2.25 m－ 2.0 mを測る。主軸方位はN－ 15°－Eである。

柱の掘方は直径 40 ～ 50cm の円形を基本とし、確認面からの深さは約 40cm を測る。柱痕跡等は確認されなかった。

図示できる遺物は出土しなかった。

第４号掘立柱建物跡（第 12 図、第 14 図 11 ～ 16、第２表）

調査区南東部に位置し、第５号溝に切られ、第６号竪穴建物跡、第３号溝と重複する。側柱式掘立柱建物で、桁行３間（6.7 m）×梁行２間（5.9 m）である。柱間は桁行南列が西から 1.9 m－ 2.5 m－ 2.3 m、梁行西列北から 3.0 m－ 2.9 mを測る。主軸方位はN－ 85°－Wである。

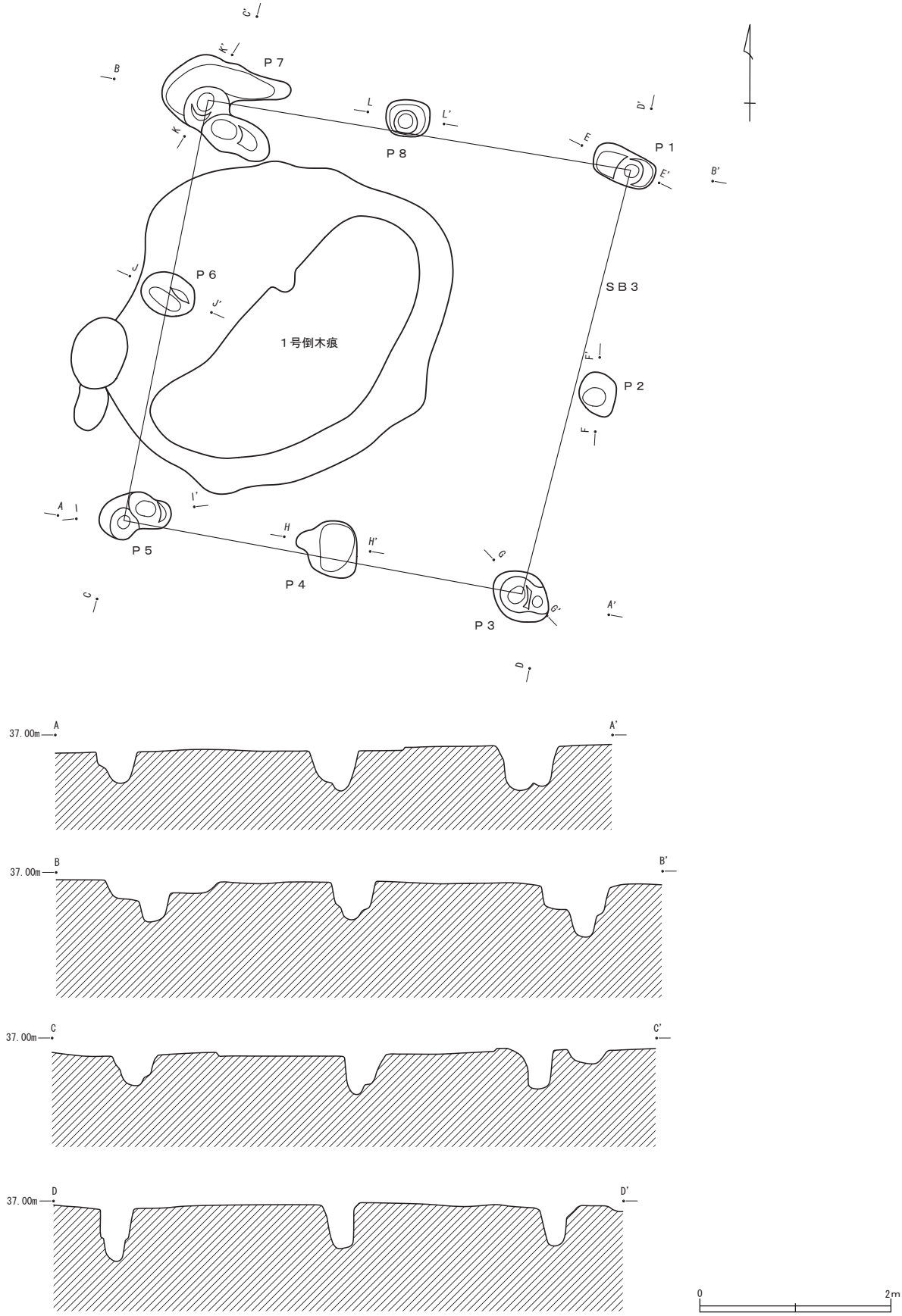
柱の掘方は直径 60 ～ 80cm の円形を基本とし、確認面からの深さは 40 ～ 60cm を測る。一部空洞化した柱痕跡が確認された。また、Ｐ３から炭化米が出土した。

図示できた遺物は、第 14 図 11 ～ 16 である。11 は灰釉陶器の高台椀、12 ～ 14 は須恵器甕、15 は土師器甕、16 は土師器台付甕である。11 はＰ２、12 ～ 14 はＰ７、15 はＰ５、16 はＰ３出土である。

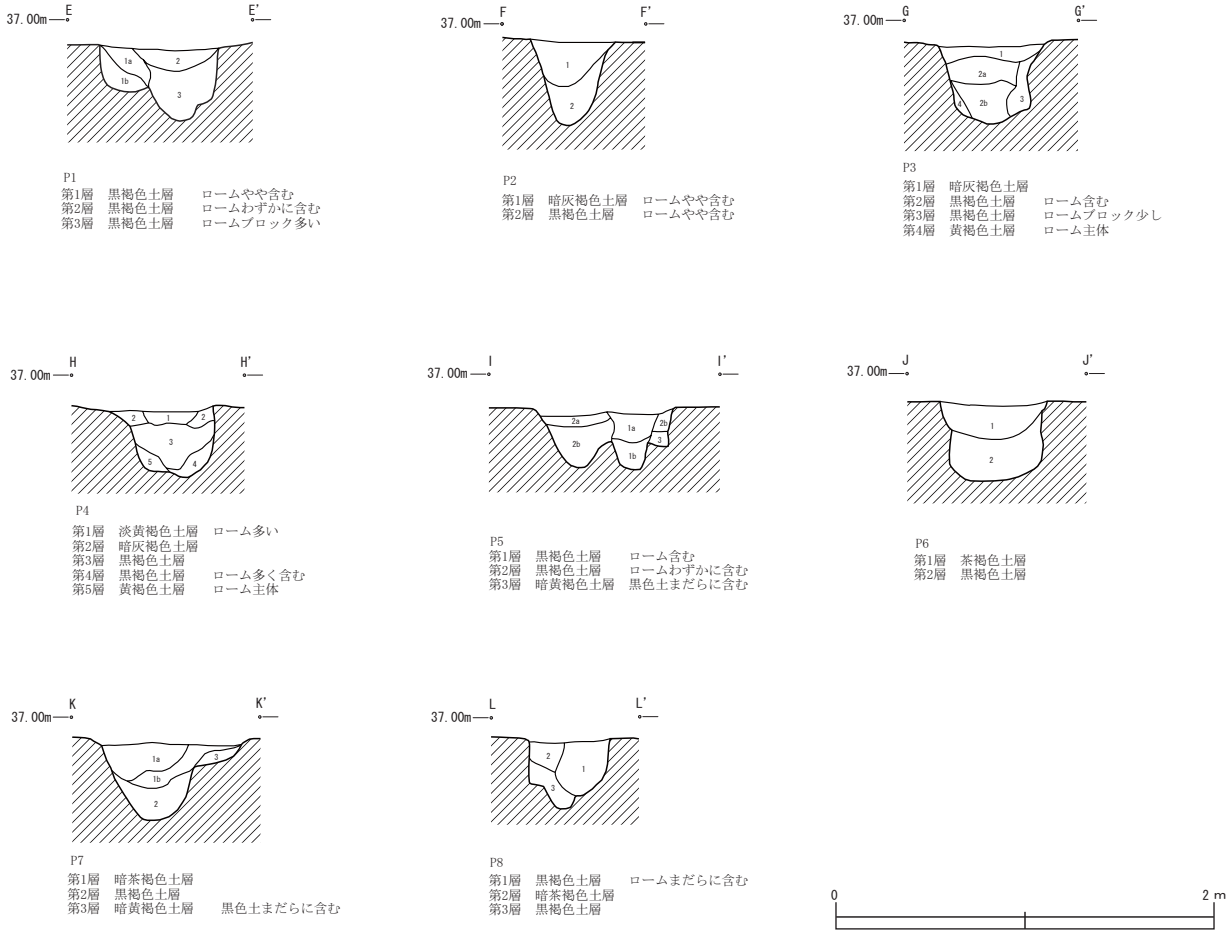
第５号掘立柱建物跡（第 13 図、第 14 図 17、第２表）

調査区東部に位置する。側柱式掘立柱建物で、桁行３間（7.7 m）×梁行２間（5.3 m）である。柱間は桁行南列が西から 2.9 m－ 2.7 m－ 2.1 m、梁行西列が北から 2.6 m－ 2.7 mを測る。主軸方位はN－ 90°－Wである。

柱の掘方は一辺 70 ～ 80cm の隅丸方形を基本とし、一部Ｌ字形の形態である。確認面からの深さは 50 ～



第 10 図　第３号掘立柱建物跡



第 11 図　第３号掘立柱建物跡断面図

80cm を測る。掘方下部で柱痕跡が確認され、Ｐ３では直径約 30cm の柱根が遺存していた。断面観察から、掘方上部にて柱は切り取られたものと考えられる。柱穴内の充填埋土は非常に硬く締まっていた。

図示できた遺物は、第 14 図 17 の灰釉陶器の高台椀で、Ｐ２から出土した。また、Ｐ２から三彩の小破片が出土した。

遺構の時期は９世紀後半頃と推定される。

b　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第 15 図）

調査区南西隅に位置し、第１号溝に切られ、第１号掘立柱建物跡と重複する。調査区壁面土層断面から、掘り込みの深さは 25cm を測る。平面的には、北壁際の掘方のみ確認された。

図示できる遺物は出土しなかった。

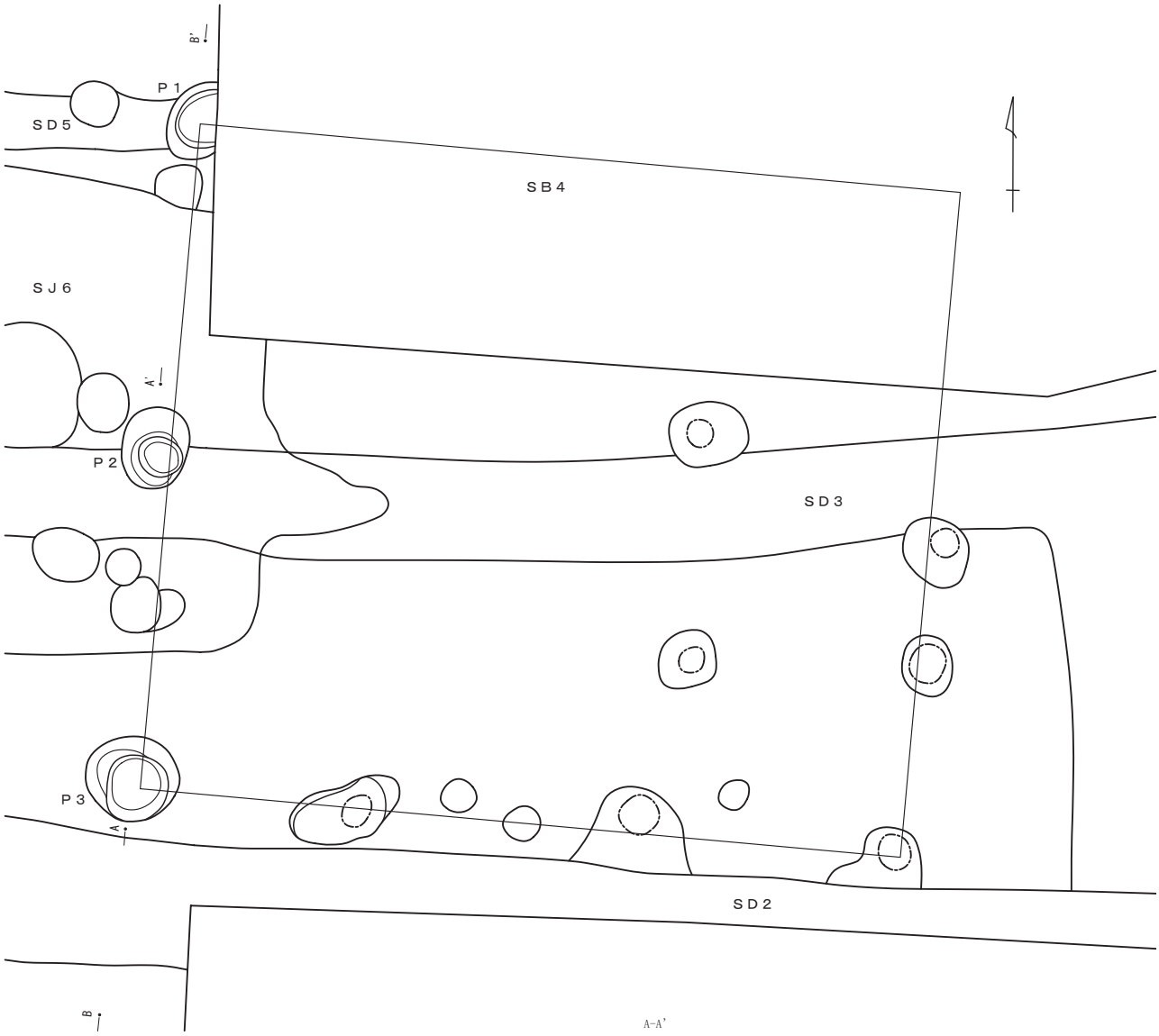
第２号竪穴建物跡（第 16 図、第 21 図１～３、第３表）

調査区南部に位置し、第２号竪穴建物跡に切られる。平面形態は方形で、東西軸 2.6 ｍを測る。主軸方位はＮ－ 108°－Ｅである。

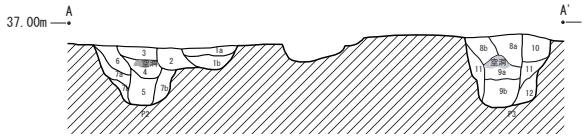
確認面からの深さはほとんど無いが、調査区壁面土層断面から、掘り込みの深さは 20cm を測る。カマドは東壁ほぼ中央に構築される。袖は粘土により造られる。燃焼部の幅は 30cm である。壁溝は西壁際で確認され、幅 15cm、床面からの深さ３cm を測る。ほぼ中央に、床下土坑とみられる直径１ｍ、床面からの深さ 25cm の掘り込みが確認された。

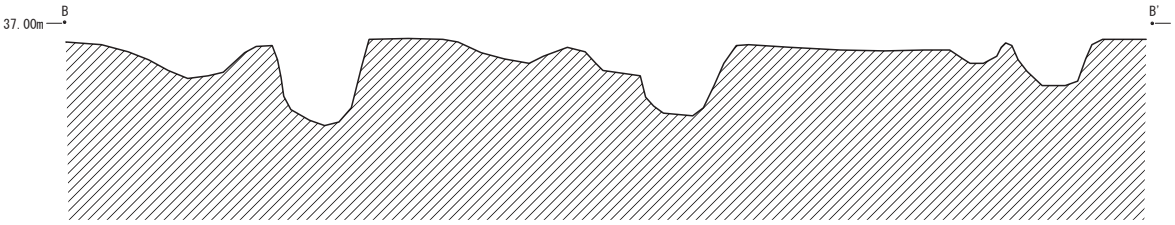
図示できた遺物は、第 21 図１～３である。１は土師器坏、２は須恵器坏、３は土師器甕である。

遺構の時期は、９世紀中葉～後半と推定される。



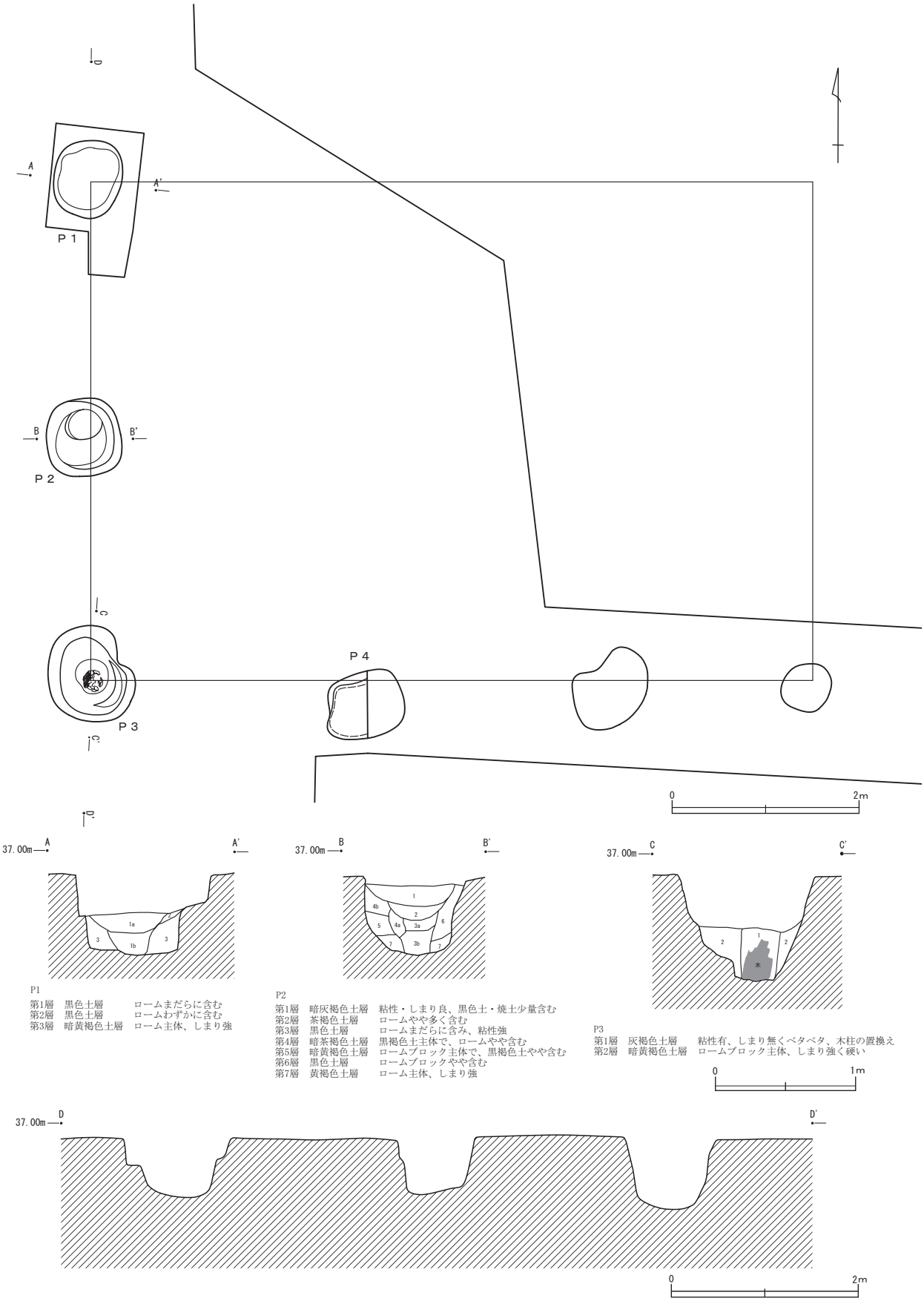
A-A'
第1層　暗茶褐色土層　ロームわずかに含む（SD-3覆土）
第2層　茶褐色土層　ロームやや多い（SD-3覆土）
第3層　暗灰褐色土層　焼土・炭化物少量含む
第4層　淡黒褐色土層　ロームわずかに含む
第5層　淡黒褐色土層　粘性強、ローム含む
第6層　茶褐色土層　ロームまだらに含む
第7層　暗黄褐色土層　ロームブロック主体
第8層　淡灰褐色土層　炭化物やや多く含む
第9層　黒褐色土層　ローム少量含む
第10層　黒褐色土層　ロームやや多く、粘性強
第11層　暗黄褐色土層　ロームまだらに含む
第12層　黄褐色土層　黒色土粒子まだらに含み、しまり良



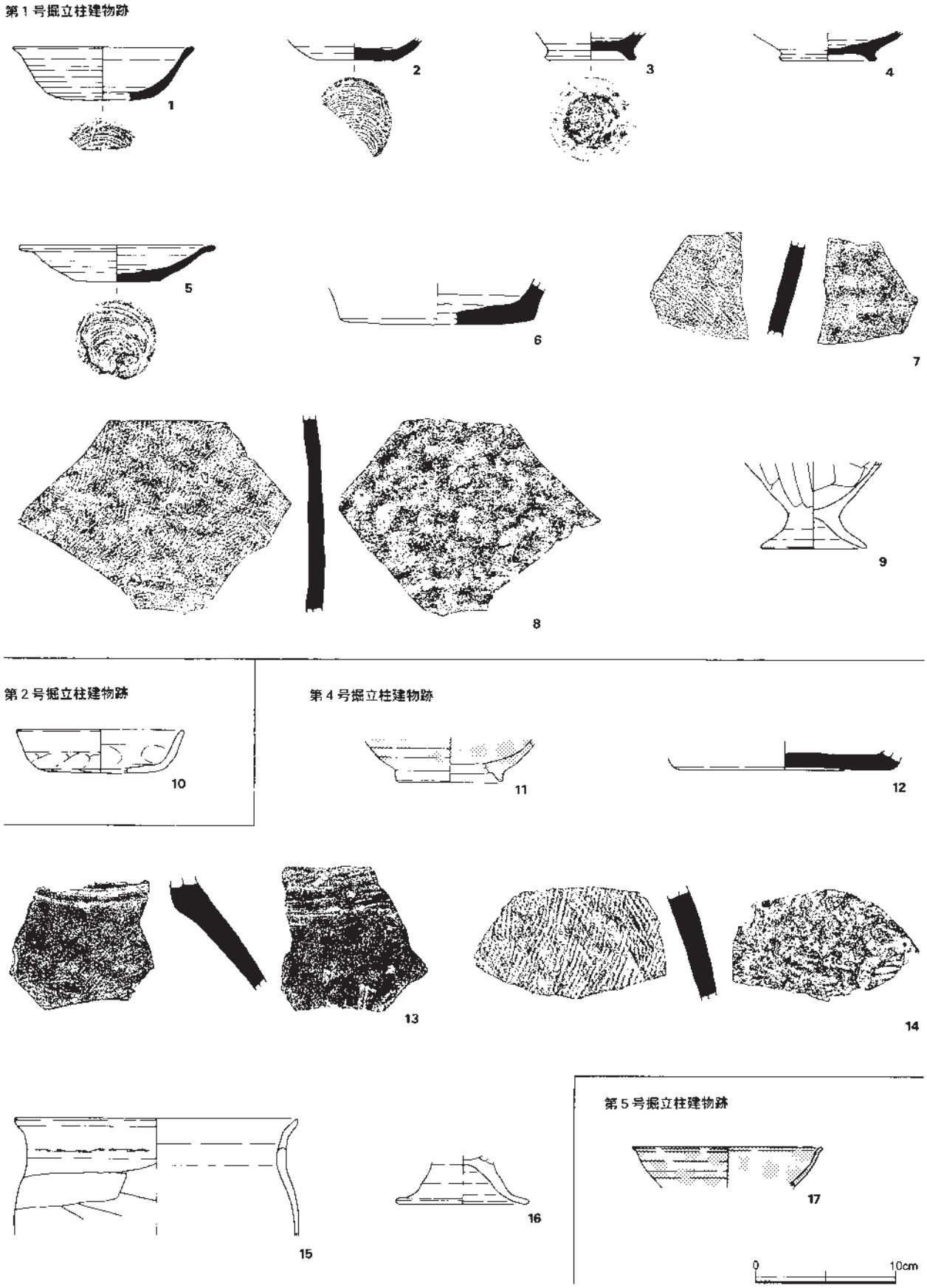


0　2m

第12図　第4号掘立柱建物跡



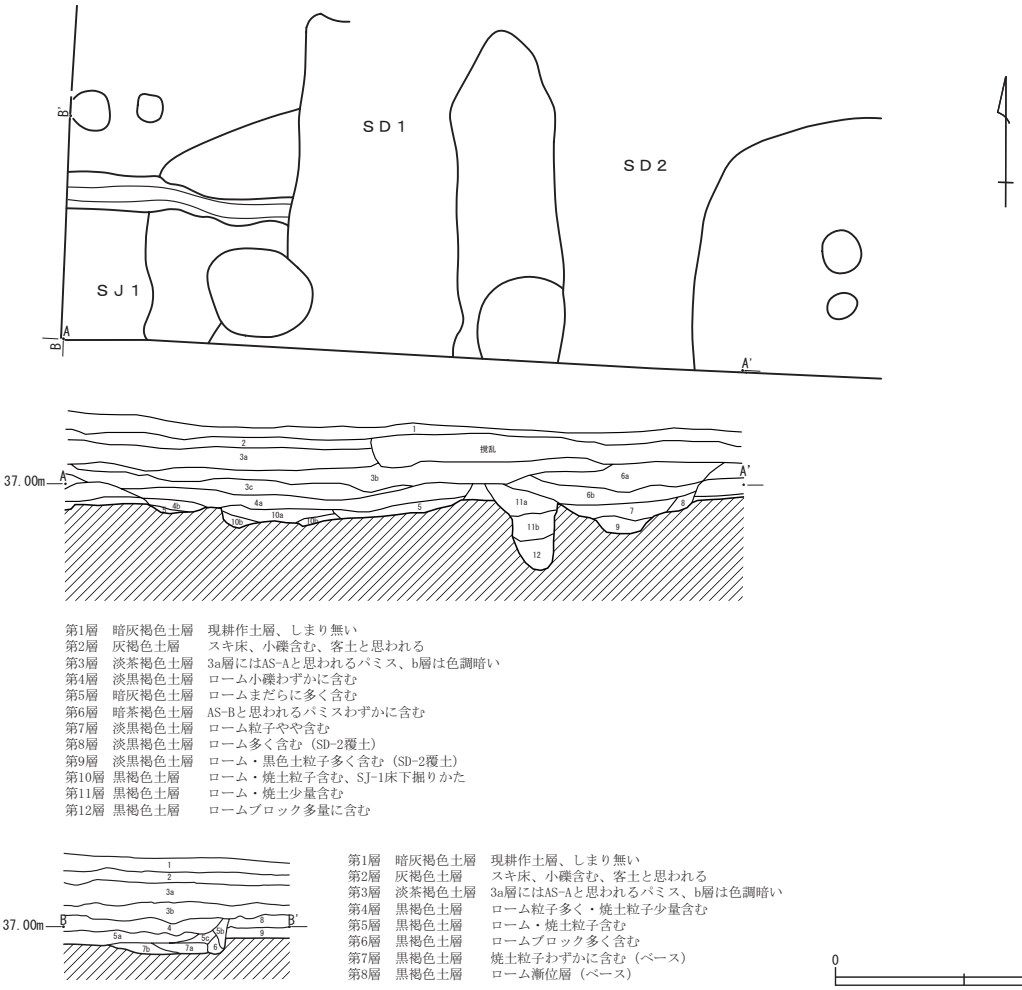
第 13 図　第５号掘立柱建物跡



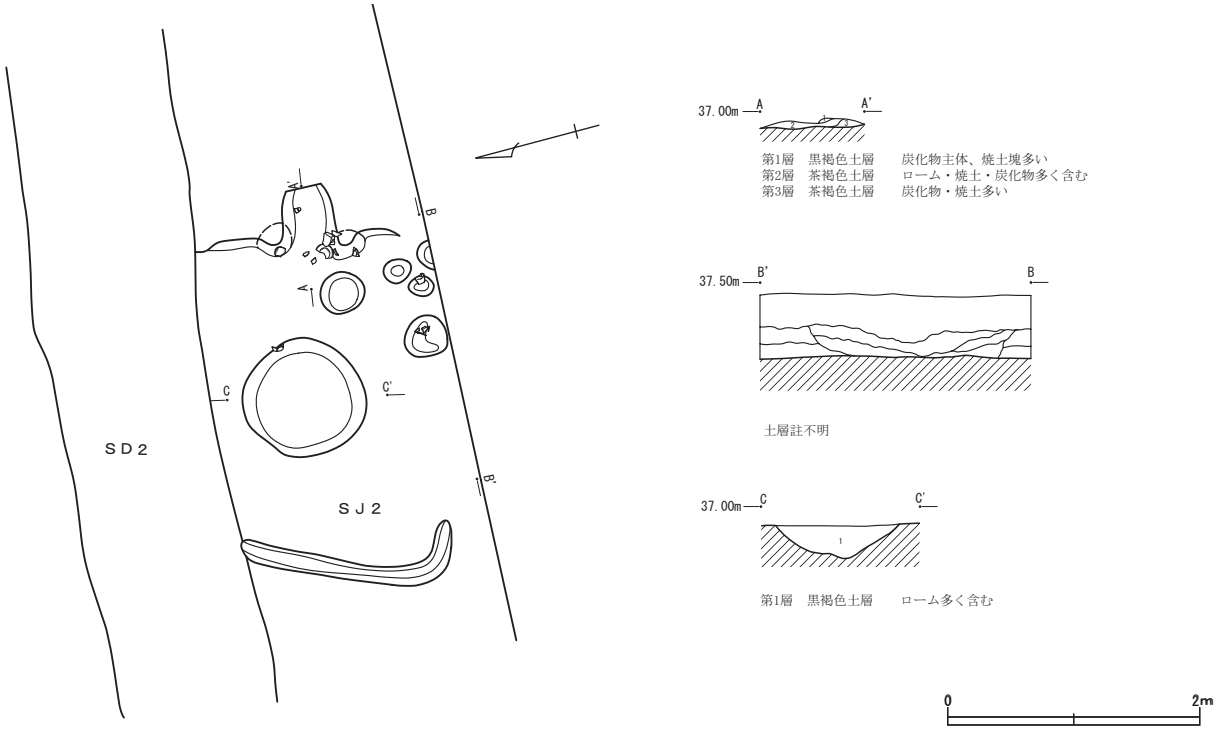
第 14 図　掘立柱建物跡出土遺物

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
14図 1	SB1	S	坏	(12.8)	3.8	(5.0)	ACFH	良	青灰	25%	
2		S	坏			5.5	ACEGH	普	灰褐	20%	
3		S	高台坏			6.2	ABCH	普	灰	20%	
4		S	高台坏			(6.8)	ACFH	良	青灰	20%	
5		S	皿	13.6	2.7	6.0	ACEFH	不良	灰褐	80%	
6		S	甕			(13.8)	ABCFH	普	赤灰		
7		S	甕				ACH	良	青灰		
8		S	甕				ACFH	良	青灰		
9		H	台付甕			(7.4)	ABCEH	普	橙	15%	
10	SB2	H	坏	(11.8)	3.1		ACEI	普	橙	20%	
11	SB4	K	高台椀			(7.4)	AC	普	灰	10%	
12		S	甕			15.0	ACFH	普	灰		
13		S	甕				ACDEH	普	灰		
14		S	甕				ACFH	普	灰		
15		H	甕	20.0							
16		H	台付甕			9.2	ABCE	普	赤褐	10%	
17	SB5	K	高台椀	(13.4)			AC	良	灰	10%	

第２表　掘立柱建物跡出土遺物観察表



第 15 図　第１号竪穴建物跡



第 16 図　第２号竪穴建物跡

第３号竪穴建物跡（第 17 図）

調査区北部に位置し、第２号掘立柱建物跡、第１号溝に切られる。平面形態は方形で、南北軸 2.7 mを測る。主軸方位はN－ 100°－Eである。

確認面からの深さは 10cm で、床下土坑が多く認められる。カマドは東壁やや南寄りに構築される。燃焼部の幅は 60cm で、袖は確認されなかった。

図示できる遺物は出土しなかった。

第４号竪穴建物跡（第 18 図、第 21 図４～８、第３表）

調査区北西部に位置する。平面形態は方形で、南北軸 4.0 m、東西軸 3.3 mを測る。主軸方位はN－ 107°－Eである。

確認面からの深さは 15cm で、カマド付近の掘方は凹凸が激しい。カマドは東壁やや南寄りに構築される。燃焼部の幅は 60cm で、袖は確認されなかった。壁溝は北壁、東壁の一部を除いて確認された。幅 15cm、床面からの深さ５cm を測る。

図示できた遺物は、第 21 図４～８である。４は須恵器高台坏、５～７は土師器甕、８は甑である。

遺構の時期は、９世紀後半～ 10 世紀初頭と推定される。

第５号竪穴建物跡（第 19 図、第 21 図９、第３表）

調査区北部に位置する。平面形態は台形で、東西軸 3.4 m、南北軸 2.05 ～ 2.55 mを測る。主軸方位はN－ 98°－Eである。

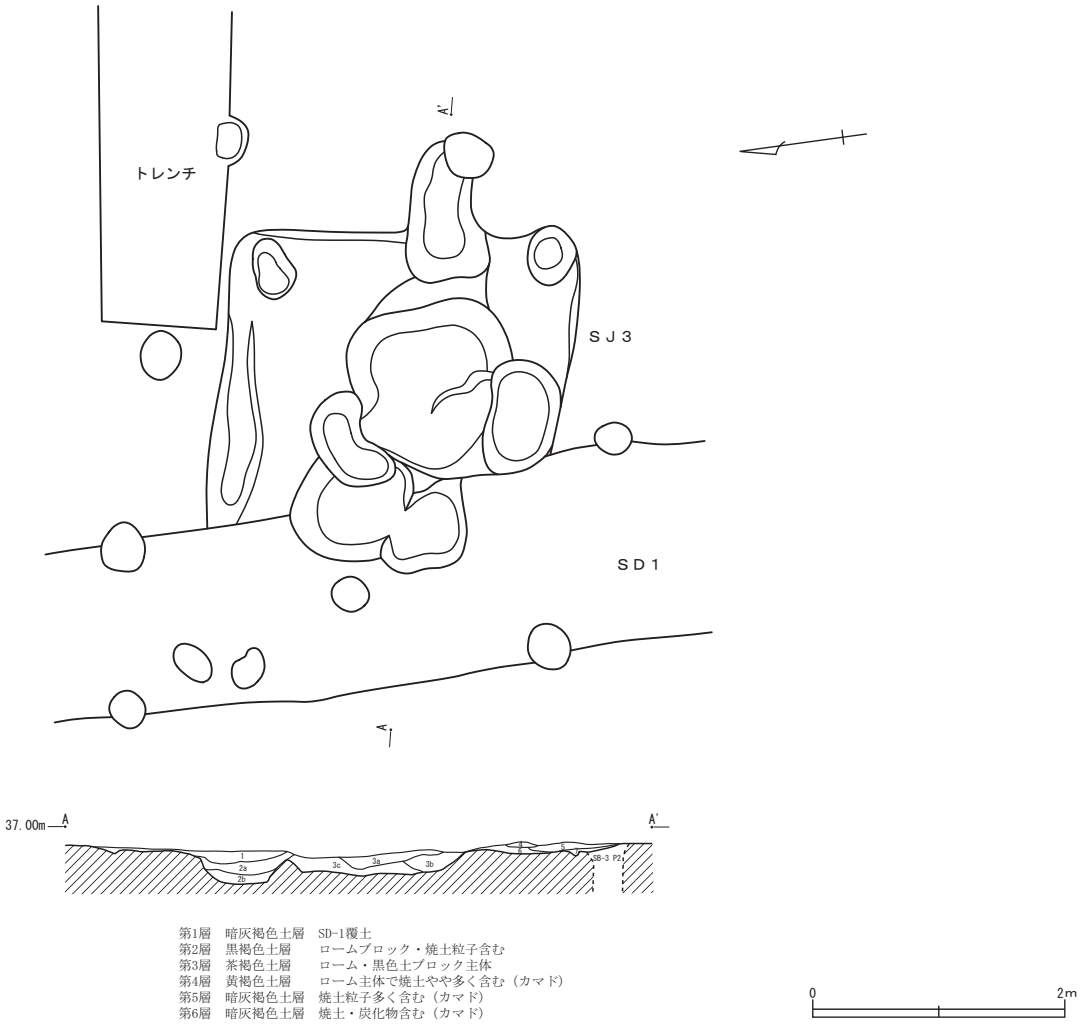
床面はカマド周辺が高く、やや低い壁面付近は確認面から 10cm の深さである。カマドは東壁やや南寄りに構築される。燃焼部の幅は 50cm で、袖は確認されなかった。燃焼部は、確認面から 20cm 皿状に掘り込まれる。

図示できた遺物は、第 21 図９の土師器坏である。

第６号竪穴建物跡（第 20 図、第 21 図 10 ～ 16、第３表）

調査区南東部に位置し、第３号溝を切り、第４号掘立柱建物跡と重複する。また、ほぼ中央を土坑に切られる。平面形態は方形で、東西軸 5.0 m、東西軸 4.3 mを測る。主軸方位はN－ 95°－Eである。

確認面からの深さは 10cm で、壁は斜めに立ち上がる。



第 17 図　第３号竪穴建物跡

カマドは東壁やや南寄りに構築される。

図示できた遺物は、第 21 図 10 ～ 16 である。10 は須恵器皿、11 は須恵器瓶、12 は須恵器甕、13 はロクロ土師器坏、14 はロクロ土師器高台坏、15 は土師器甕、16 は鉄滓である。

遺構の時期は、10 世紀前半と推定される。

c　土　　坑

第１号土坑（第 22 図）

調査区西部に位置し、第 1 号溝と重複する。平面形態は円形で、直径 1.2 ｍを測る。確認面からの深さは 50cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第２号土坑（第 22 図）

調査区中央部に位置し、ピットに切られる。平面形態は円形で、直径 1.2 ｍを測る。確認面からの深さは 60cm で、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

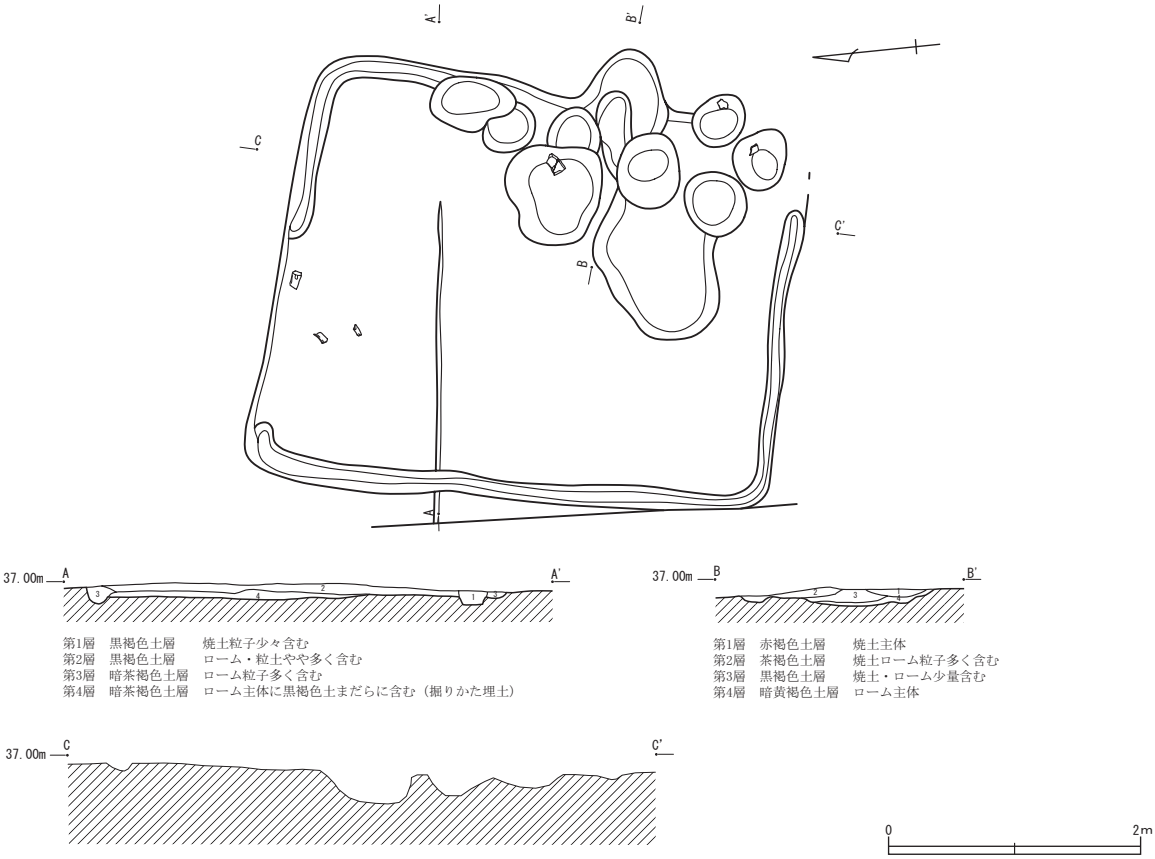
第３号土坑（第 22 図、第 28 図 1 、第４表）

調査区中央部に位置し、第４号土坑に切られる。平面形態は円形で、直径 95cm を測る。確認面からの深さは 10cm で、壁は斜めに立ち上がる。

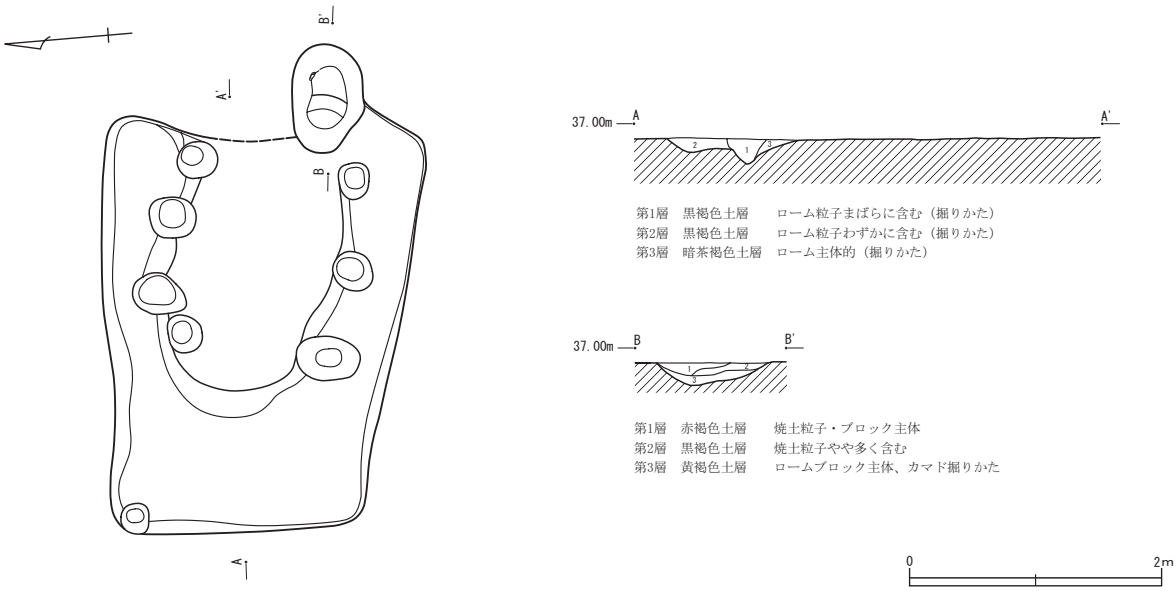
図示できた遺物は、第 28 図 1 の土師器台付甕である。

第４号土坑（第 22 図）

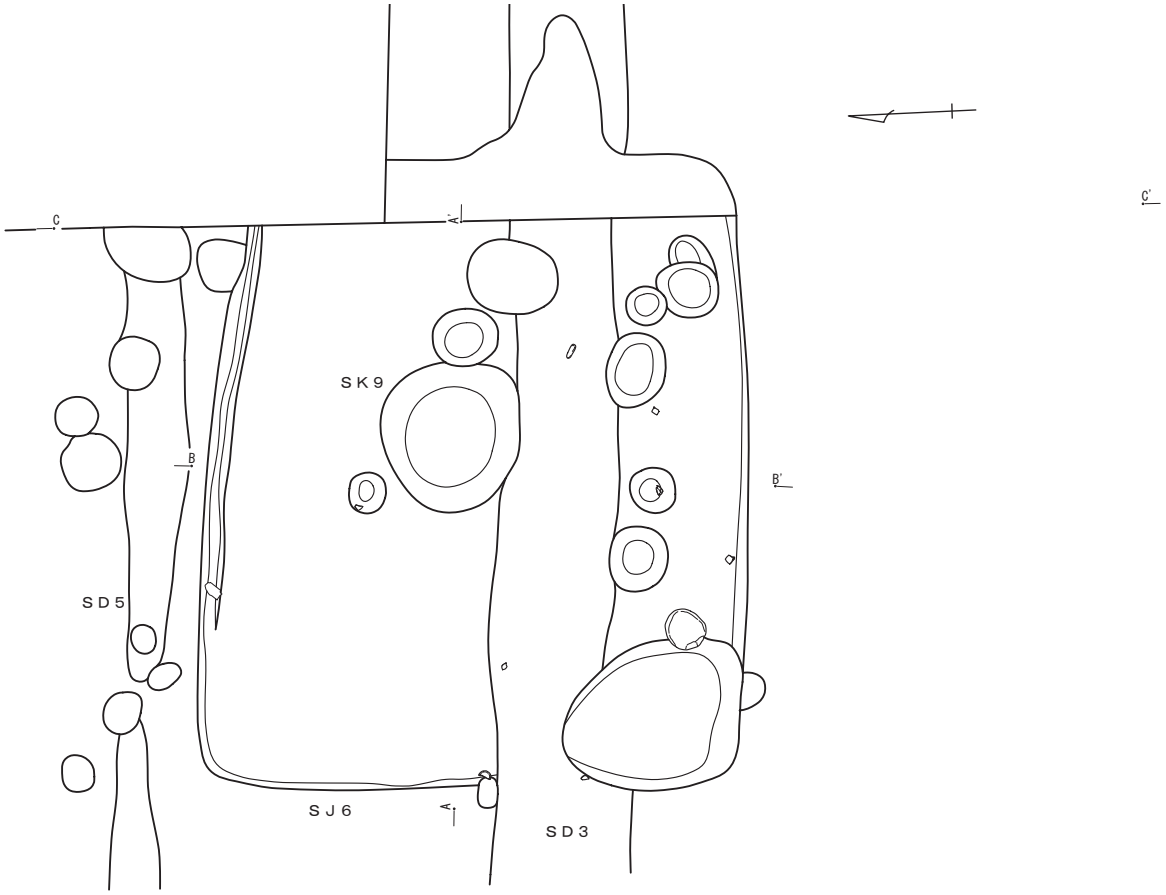
調査区中央部に位置し、第３号土坑を切る。平面形

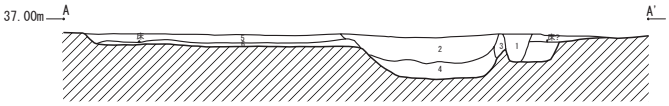


第 18 図　第４号竪穴建物跡

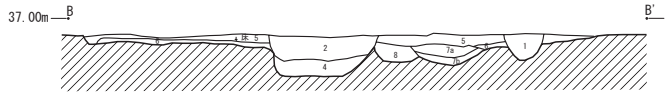


第 19 図　第５号竪穴建物跡

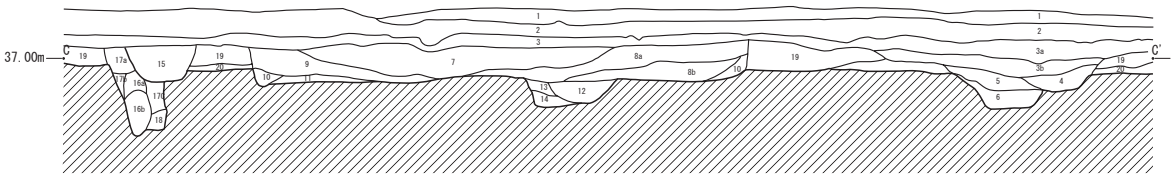




第1層　暗灰色土層　ローム・炭化物少量含む（pit覆土）
第2層　暗茶褐色土層　ロームわずか含む（SK9覆土）
第3層　暗黄褐色土層　ローム主体（SK9覆土）
第4層　茶褐色土層　ロームブロックやや多い（SK9覆土）
第5層　淡黒褐色土層　焼土・炭化物やや含む（住居覆土）
第6層　茶褐色土層　ローム多い（住居ホリカタ）
第7層　淡黒褐色土層　ロームわずか（SD-3覆土）
第8層　淡黒褐色土層　ロームやや多い（SD-3覆土）



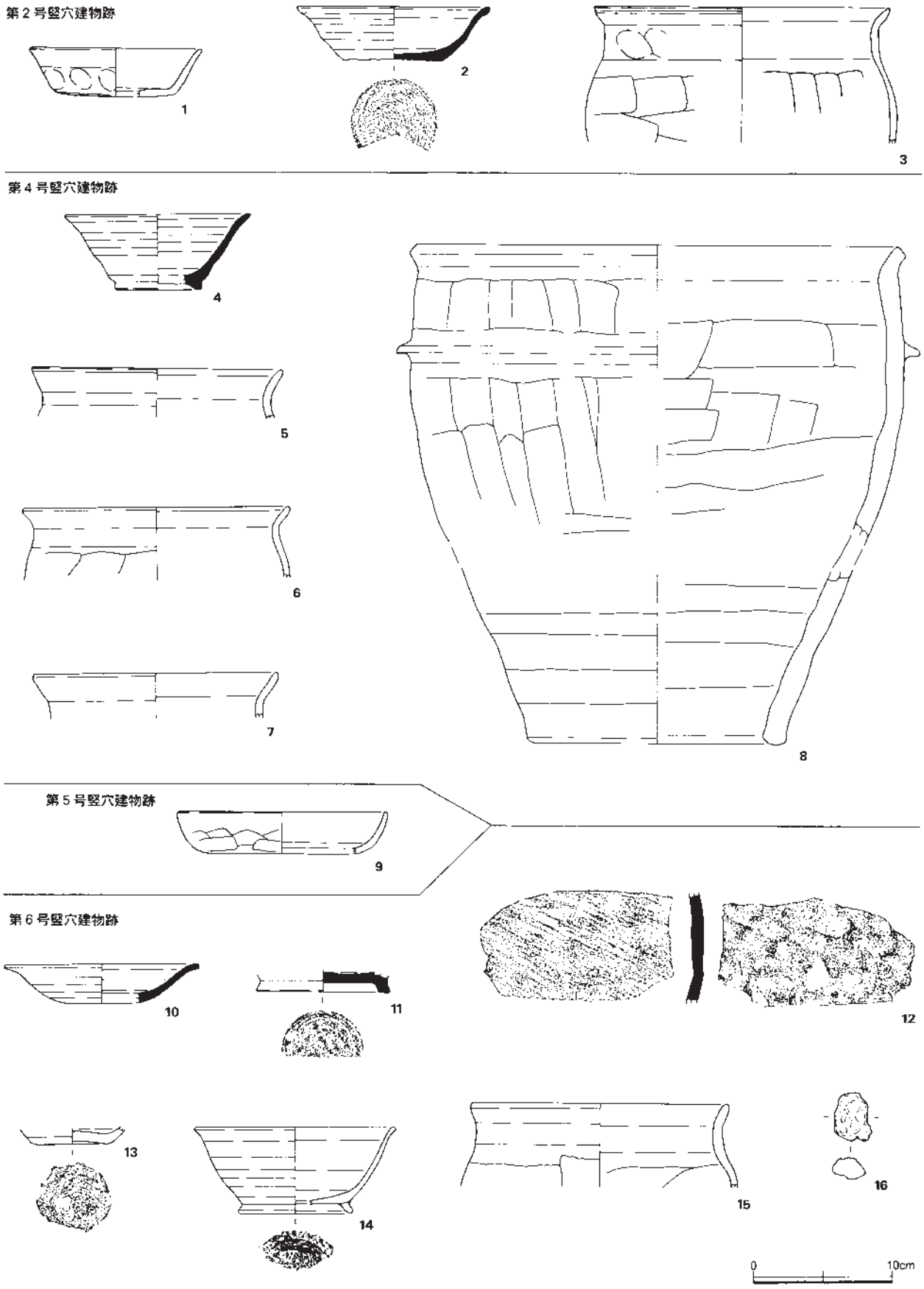
第1層　暗灰色土層　ローム・炭化物少量含む（pit覆土）
第2層　暗茶褐色土層　ロームわずか含む（SK9覆土）
第3層　暗黄褐色土層　ローム主体（SK9覆土）
第4層　茶褐色土層　ロームブロックやや多い（SK9覆土）
第5層　淡黒褐色土層　焼土・炭化物やや含む（住居覆土）
第6層　茶褐色土層　ローム多い（住居ホリカタ）
第7層　淡黒褐色土層　ロームわずか（SD-3覆土）
第8層　淡黒褐色土層　ロームやや多い（SD-3覆土）



第1層　淡茶褐色土層　旧表土層
第2層　淡茶褐色土層　スキ床、焼土・炭化物含む
第3層　淡黒褐色土層　焼土粒子含む
第4層　暗灰褐色土層　ローム・焼土わずか含む
第5層　灰茶褐色土層　ロームわずか含む
第6層　灰茶褐色土層　ロームブロック多く含む
第7層　暗茶褐色土層　焼土粒子多く、ローム少量含む
第8層　暗茶褐色土層　焼土ブロック多く、ロームやや多く含む
第9層　暗茶褐色土層　ローム・焼土少量含む
第10層　暗茶褐色土層　ロームやや多く、焼土少量含む
第11層　暗黄褐色土層　ローム粒子主体、ハリ床
第12層　灰茶褐色土層　ローム粒子まだらに少量含む
第13層　灰茶褐色土層　焼土やや多く含む
第14層　茶褐色土層　ロームわずかに含む
第15層　黒褐色土層　焼土粒子わずかに含む、SD覆土
第16層　黒褐色土層　焼土・炭化物やや多く含む
第17層　黒褐色土層　ロームまだらに多く、炭化物少量含む
第18層　暗黄褐色土層　ローム主体、しまり強い
第19層　黒褐色土層　ローム粒子わずか含む、旧表土
第20層　茶褐色土層　ローム漸位層

0　2m

第20図　第6号竪穴建物跡



第 21 図　竪穴建物跡出土遺物

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
21図 1	SJ2	H	坏	(12.2)	3.5		ＡＢＣＥＩ	普	橙	25%	
2		S	坏	13.7	3.8	7.0	ＡＣＨ	普	灰	50%	
3		H	甕	(21.2)			ＡＢＣＥ	普	橙	5%	
4	SJ4	S	高台坏	(13.2)	5.4	(6.0)	ＡＣＦＨ	普	灰	30%	
5		H	甕	(18.0)			ＡＢＣＥＩ	普	橙	20%	
6		H	甕	(19.0)			ＡＢＣＥ	普	橙		
7		H	甕	(17.4)			ＡＢＣＥ	普	白橙		
8		H	甑	(34.8)	(35.8)	(18.0)	ＡＢＣＥＨ	普	灰橙	25%	
9	SJ5	H	坏	(14.9)	(3.0)		ＡＢＣＥ	普	橙	20%	
10	SJ6	S	皿	(13.7)	(2.8)		ＡＣＦＨ	不良	灰褐	25%	
11		S	瓶			9.5	ＡＢＣＥＨ	不良	灰褐	5%	
12		S	甕				ＡＢＣＨ	良	青灰		
13		R	坏			5.0	ＡＢＨ	良	暗橙	25%	
14		R	高台椀	(14.1)	6.2	(8.0)	ＡＢＣＥＨ	普	赤褐	30%	
15		H	甕	(18.2)			ＡＢＣＥＦＨＩ	普	橙	5%	
16			鉄滓	長3.4	幅2.3	厚1.5					重さ17.18ｇ

第３表　竪穴建物跡出土遺物観察表

態は円形で、直径70cm、確認面からの深さ５cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

第５号土坑（第22図）

調査区中央部に位置する。平面形態は円形で、直径１ｍを測る。確認面からの深さは15cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第６号土坑（第22図）

調査区中央部に位置する。平面形態は不整円形で、長径２ｍ、短径1.4ｍを測る。底面は西側がやや深く確認面から80cmの深さで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第７号土坑（第22図）

調査区中央部に位置する。平面形態は楕円形で、長径1.5ｍ、短径0.9ｍを測る。確認面からの深さは25cmで、壁は斜めに立ち上がる。

第４図１のナイフ形石器が、壁面に刺さった状態で出土した。

第８号土坑（第22図）

調査区東部に位置する。平面形態は不整楕円形で、長径1.8ｍ、短径0.9ｍを測る。確認面からの深さは15cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

第９号土坑（第20図）

調査区南東部に位置し、第６号竪穴建物跡を切る。平面形態は円形で、直径1.2ｍを測る。確認面からの深さは30cmで、壁は斜めに立ち上がる。

図示できる遺物は出土しなかった。

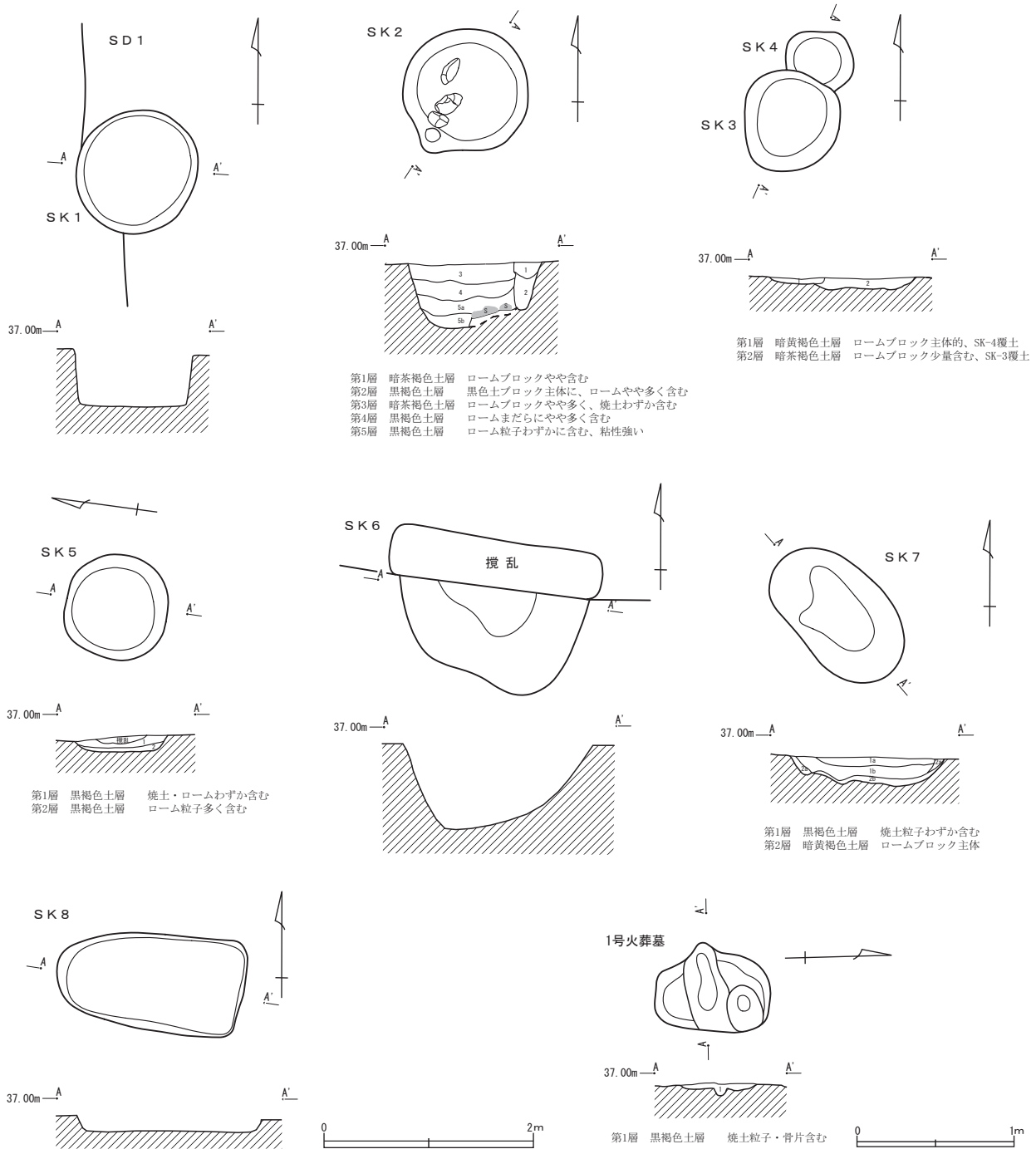
ｄ　火葬墓

第１号火葬墓（第22図、第28図２、第４表）

調査区南部に位置する。平面形態は不整方形で、長軸1.1ｍ、短軸0.75ｍ、確認面からの深さ５cmを測る。焚き口は西を向く。

図示できた遺物は、第28図２の銅環である。

遺構の時期は中世と推定される。



第22図　土坑・火葬墓

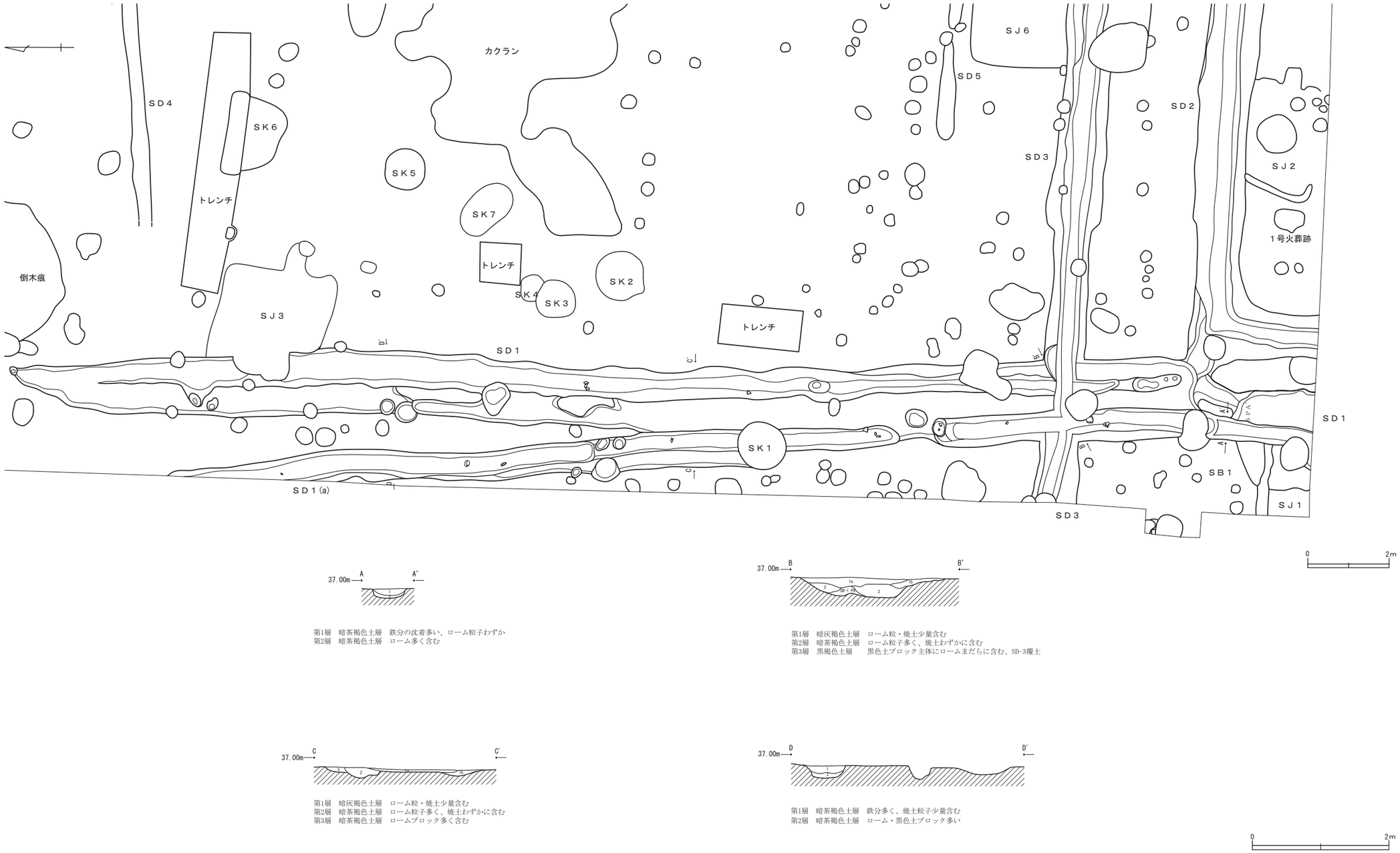
e　溝

第１号溝（第23図、第28図３～10、第４表）

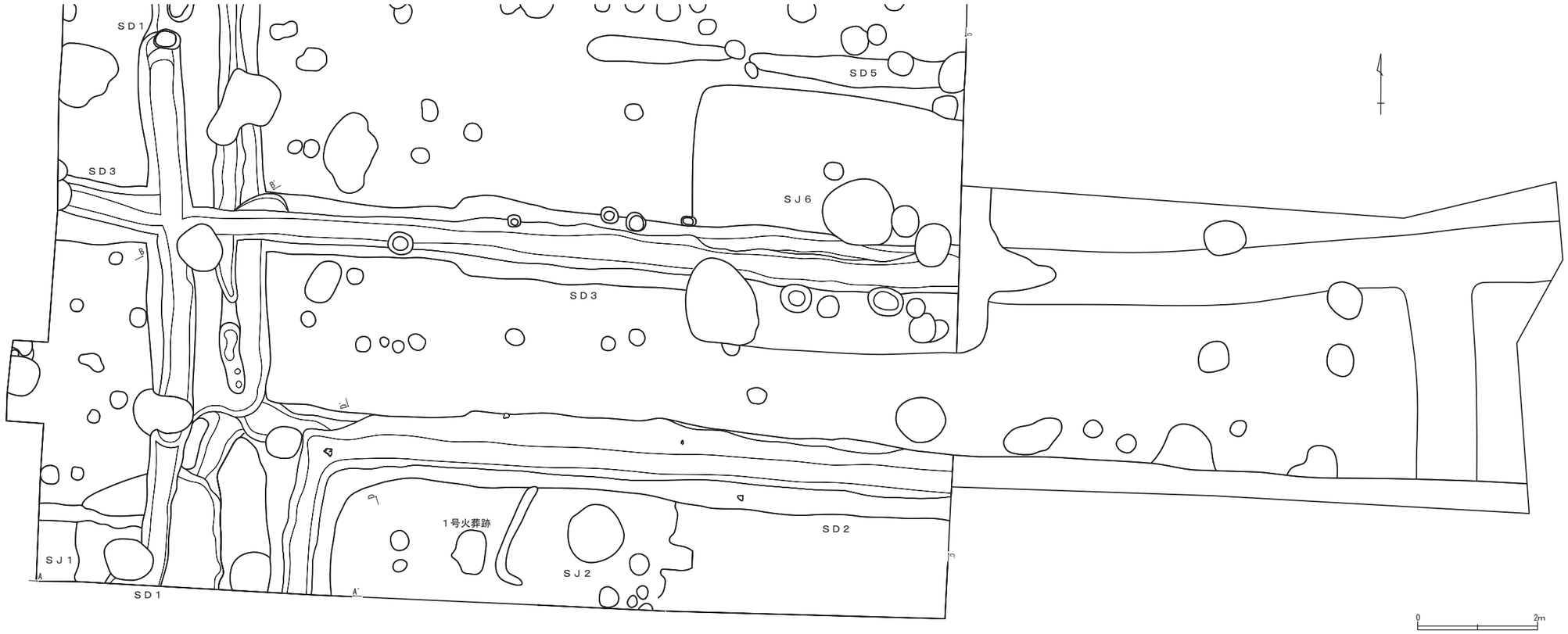
調査区西部に位置し、南北方向に走る。第１・２号掘立柱建物跡、第３号竪穴建物跡を切り、第１号土坑と重複する。幅約２ｍで中央が浅く、東西両端が深くなる。確認面からの深さは５～30cmを測る。北部では流路が二股に分かれている。

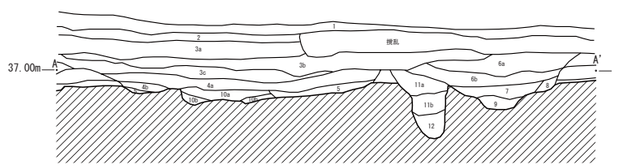
図示できた遺物は、第28図３～10である。３は青磁椀、４・５は常滑焼の甕、６は瓦質の鉢、７は瓦、８は須恵器甕、９は土錘、10は砥石である。

遺構の時期は、中世と推定される。

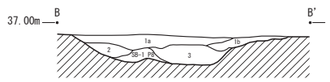

カクラン
SD4
SK6
トレンチ
倒木痕
SJ3
SK5
SK7
トレンチ
SK4
SK3
SK2
SD1
トレンチ
SK1
SD1(a)
SJ6
SD5
SD3
SD2
SJ2
1号火葬跡
SD1
SB1
SJ1
SD3
0
2m
37.00m
A
A'
第1層　暗茶褐色土層　鉄分の沈着多い、ローム粒子わずか
第2層　暗茶褐色土層　ローム多く含む
37.00m
B
B'
第1層　暗灰褐色土層　ローム粒・焼土少量含む
第2層　暗茶褐色土層　ローム粒子多く、焼土わずかに含む
第3層　黒褐色土層　黒色土ブロック主体にロームまだらに含む、SD-3覆土
37.00m
C
C'
第1層　暗灰褐色土層　ローム粒・焼土少量含む
第2層　暗茶褐色土層　ローム粒子多く、焼土わずかに含む
第3層　暗茶褐色土層　ロームブロック多く含む
37.00m
D
D'
第1層　暗茶褐色土層　鉄分多く、焼土粒子少量含む
第2層　暗茶褐色土層　ローム・黒色土ブロック多い
0
2m

第23図　第1号溝

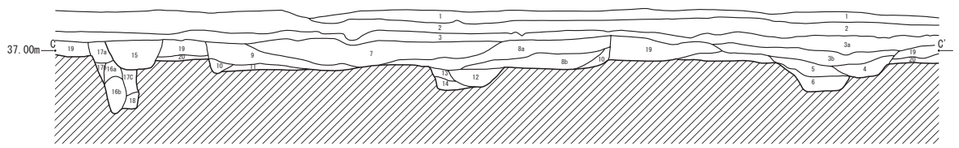




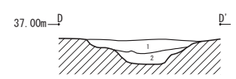
第1層　暗灰褐色土層　現耕作土層、しまり無い
第2層　灰褐色土層　スキ床、小礫含む、客土と思われる
第3層　淡茶褐色土層　3a層にはAS-Aと思われるパミス、b層は色調暗い
第4層　淡黒褐色土層　ローム小礫わずかに含む
第5層　暗灰褐色土層　ロームまだらに多く含む
第6層　暗茶褐色土層　AS-Bと思われるパミスわずかに含む
第7層　淡黒褐色土層　ローム粒子やや含む
第8層　淡黒褐色土層　ローム多く含む（SD-2覆土）
第9層　淡黒褐色土層　ローム・黒色土粒子多く含む（SD-2覆土）
第10層　黒褐色土層　ローム・焼土粒子含む、SJ-1床下掘りかた
第11層　黒褐色土層　ローム・焼土少量含む
第12層　黒褐色土層　ロームブロック多量に含む



第1層　暗灰褐色土層　ローム粒・焼土少量含む
第2層　暗茶褐色土層　ローム粒子多く、焼土わずかに含む
第3層　黒褐色土層　黒色土ブロック主体にロームまだらに含む、SD-3覆土



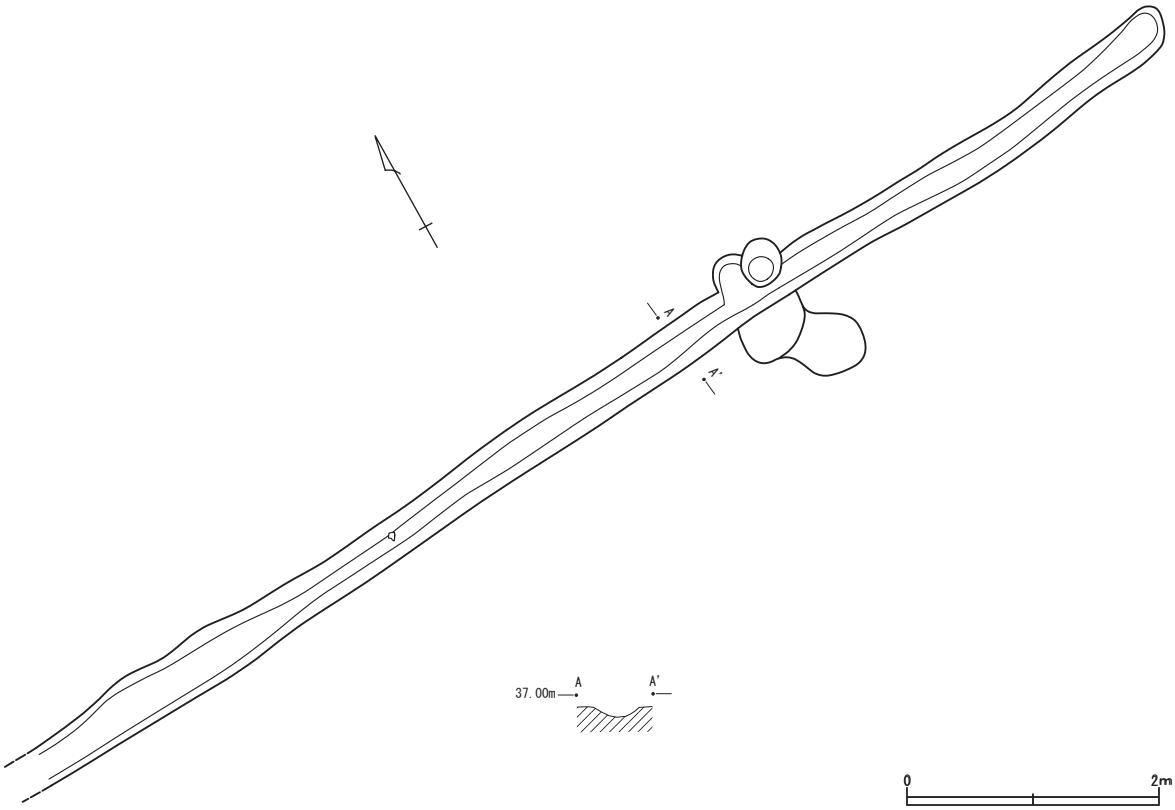
第1層　淡茶褐色土層　旧表土層
第2層　淡茶褐色土層　スキ床、焼土・炭化物含む
第3層　淡黒褐色土層　焼土粒子含む
第4層　暗灰褐色土層　ローム・焼土わずか含む
第5層　灰茶褐色土層　ロームわずか含む
第6層　灰茶褐色土層　ロームブロック多く含む
第7層　暗茶褐色土層　焼土粒子多く、ローム少量含む
第8層　暗茶褐色土層　焼土ブロック多く、ロームやや多く含む
第9層　暗茶褐色土層　ローム・焼土少量含む
第10層　暗茶褐色土層　ロームやや多く、焼土少量含む
第11層　暗黄褐色土層　ローム粒子主体、ハリ床
第12層　灰茶褐色土層　ローム粒子まだらに少量含む
第13層　灰茶褐色土層　焼土やや多く含む
第14層　茶褐色土層　ロームわずかに含む
第15層　黒褐色土層　焼土粒子わずかに含む、SD覆土
第16層　黒褐色土層　焼土・炭化物やや多く含む
第17層　黒褐色土層　ロームまだらに多く、炭化物少量含む
第18層　暗黄褐色土層　ローム主体、しまり強い
第19層　黒褐色土層　ローム粒子わずか含む、旧表土
第20層　茶褐色土層　ローム漸位層



第1層　暗灰褐色土層　ローム小ブロック少量含む
第2層　暗茶褐色土層　黒褐色土・ロームブロック多く含む

0　2m

第24図　第2・3号溝



第25図　第４号溝

第２号溝（第24図、第28図11～13、第４表）

調査区南部に位置し、第１号掘立柱建物跡、第２号竪穴建物跡を切る。東西方向に走り、調査区南西部で南へ直角に曲がる。幅約1.2ｍ、断面形態は逆台形で、確認面からの深さ約30cmを測る。掘り直されている状況が認められる。

図示できた遺物は、第28図11～13である。11は陶器の小型壷、12は常滑焼の甕、13は須恵器甕である。

遺構の時期は中世と推定され、Ｌ字状に屈曲することから、屋敷等の区画溝の可能性が考えられる。また、区画内に第１号火葬墓があり、関連する可能性が考えられる。

第３号溝（第24図）

調査区南部に位置する。東西方向に走り、第１号掘立柱建物跡を切り、第６号竪穴建物跡、第１号溝に切られる。幅0.9～1.2cm、断面形態は逆台形で、確認面からの深さ約20cmと極めて浅い。

図示できる遺物は出土しなかった。

切り合い関係から、遺構の時期は９世紀末～10世紀前半頃と推定される。

第４号溝（第25図）

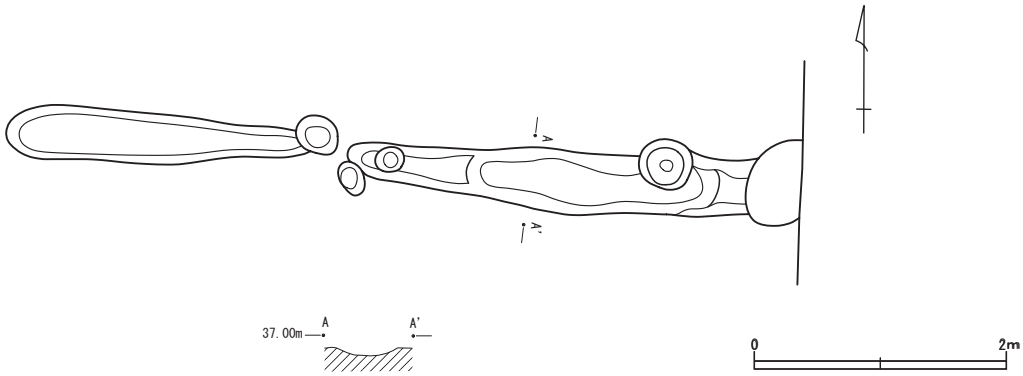
調査区北部に位置する。主軸方位はＮ－87°－Ｅで、幅は約35cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

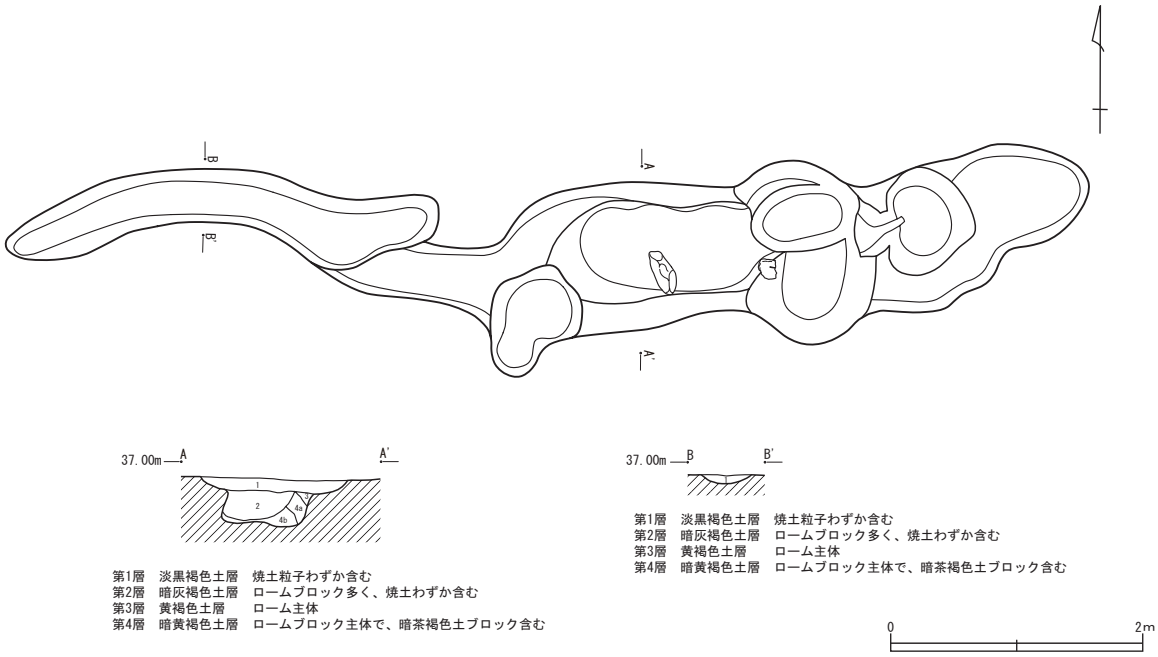
第５号溝（第26図）

調査区南部に位置し、第４号掘立柱建物跡を切る。主軸方位はＮ－84°－Ｅである。幅は約50cm、確認面からの深さは約５cmを測る。覆土は古代のものに類似しており、確実ではないが古代末のものである可能性がある。

図示できる遺物は出土しなかった。



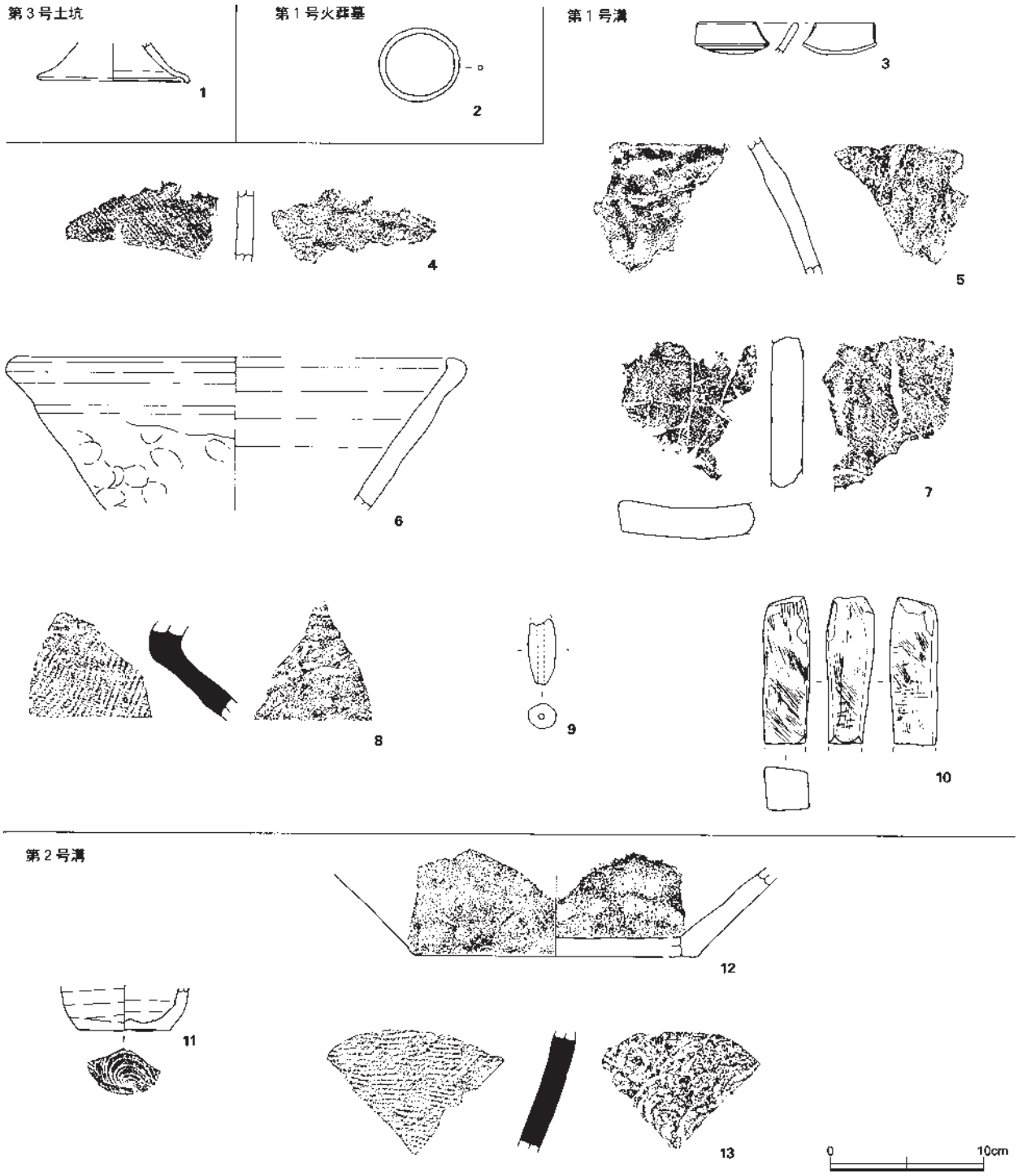
第 26 図　第５号溝



第 27 図　第１号溜井状遺構

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
28 図 1	SK3	H	台付甕			(9.8)	ＡＢＣＥＩ	普	橙		
2	1 号火葬墓		銅環	長 4.8	幅 5.2	厚 0.3					重さ 5.27 g
3	SD1	青磁	椀				ＡＣ	良	淡緑		
4		陶器	甕				ＡＣ	良	赤褐		常滑焼
5		陶器	甕				ＡＣ	良	赤褐		常滑焼、内外面に釉
6		陶器	鉢	(28.2)			ＡＢＣＨＩ	普	灰	20%	瓦質
7			瓦				ＡＢＣＨ	普	灰褐		
8		S	甕				ＡＣ	良	青灰		
9			土錘		幅 1.8	厚 1.6	ＡＢＣＥ	普	橙	80%	重さ 13.38 g
10			砥石		幅 2.9	厚 2.7					重さ 152.15 g
11	SD2	陶器	小型壷			5.8					
12		陶器	甕			(18.2)	ＡＢＣＨ	良	橙		常滑焼
13		S	甕				ＡＣＨ	良	灰		

第４表　土坑・火葬墓・溝出土遺物観察表



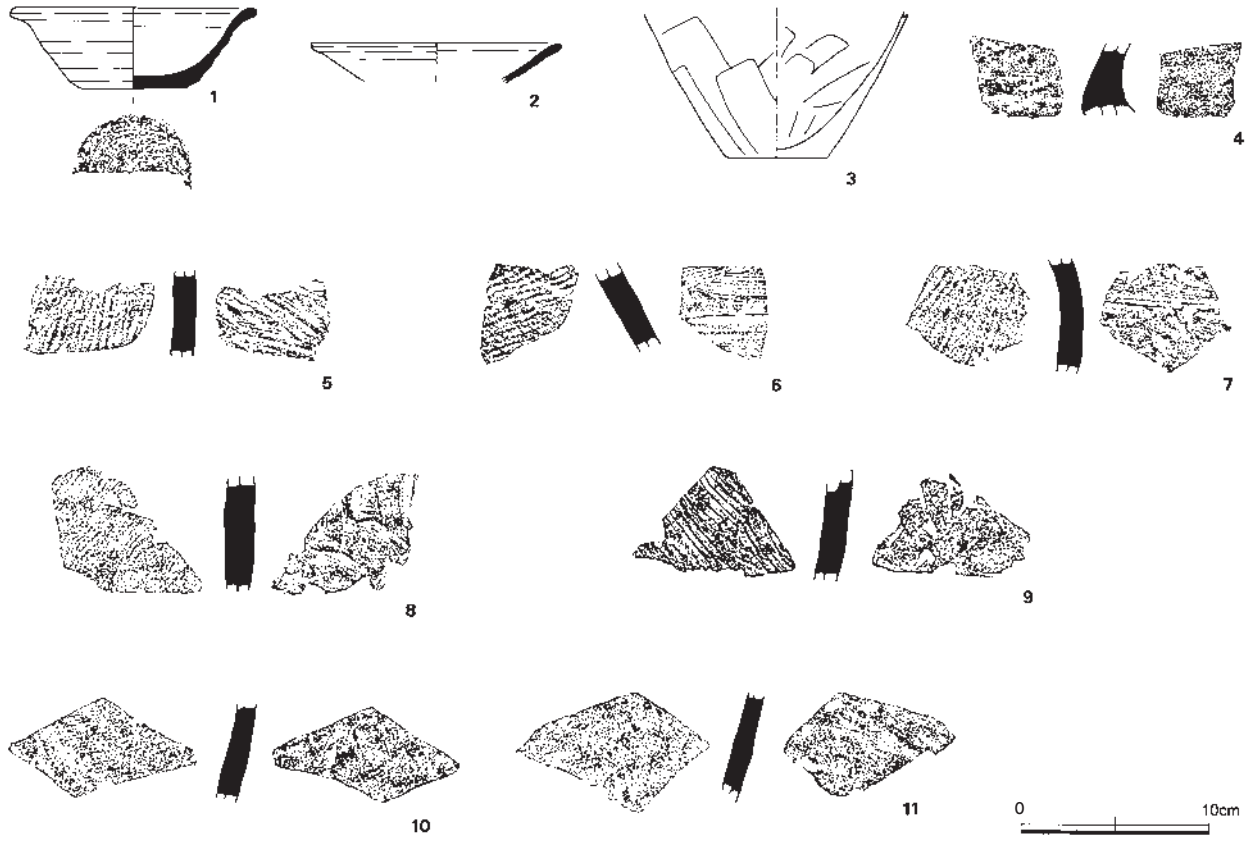
第 28 図　土坑・火葬墓・溝出土遺物

f　溜井状遺構

第１号溜井状遺構（第 27 図）

調査区北部に位置する。主軸方位はＮ－ 80°－Ｅである。東半は深く、溜井状となる。幅約 1.1 m、確認面からの深さは約 40cm で、ややオーバーハングする箇所もある。西半は幅約 40cm で、確認面からの深さは約５cm を測る。

図示できる遺物は出土しなかった。



第 29 図　調査区出土遺物

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	備考
29 図　1		S	坏	(12.5)	4.3	5.4	A B C H	不良	灰	30%	
2		S	皿	(13.0)			A C F H	普	青灰	25%	
3		H	甕			5.4	A B C E H	普	橙	10%	
4		S	甕				A C	良	青灰		
5		S	甕				A C H	良	青灰		
6		S	甕				A C H	良	青灰		
7		S	甕				A C F H	良	青灰		
8		S	甕				A C H	良	青灰		
9		S	甕				A C F H	良	青灰		
10		S	甕				A C H	良	青灰		
11		S	甕				A C F H	良	青灰		

第 5 表　調査区出土遺物観察表

Ⅳ　調査のまとめ

前章まで述べてきた通り、今回の調査では掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡６棟、土坑９基、火葬墓１基、溝５条、溜井状遺構１条等が確認された。遺跡は大沼という地名が示す通り、台地の先端部にありながらもあまり乾燥していない場所に位置する。調査時は雨が多かったこともあり、遺構が滞水する場面が多く見られた。そのため、調査は悪条件の中で行われた。しかし、そうした環境に関わらず、生活の痕跡は古くから認められ、旧深谷市域では２点目となるナイフ形石器が出土した点は注目される。また、縄文土器や石器、弥生土器も出土した。古墳時代になると遺構、遺物共に認められなくなり、再び遺構、遺物が認められるようになるのは平安時代になってからである。

掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡６棟、溝１条が平安時代に帰属すると思われる。遺構の主軸方位は正方位～20°東に傾き、竪穴建物跡のカマドは全て東を向く。全て９世紀中葉或いは後半～10世紀前半のものと思われ、比較的短期間に営まれたものと推定される。時期区分は、第３号溝を挟み先行して第１号掘立柱建物跡、後続して第６号竪穴建物跡が位置付けられ、大きく２～３段階程度の変遷が考えられる。

古段階と考えられるのは、第１～３号掘立柱建物跡と第２～５号竪穴建物跡で、10°程東に傾く。新段階と考えられるのは、第４・５号掘立柱建物跡と第１・６号竪穴建物跡であり、正方位に近い方位である。また、第３号溝に伴う小段階があったものとみられる。新段階の主軸方位は後の中世にも受け継がれる。条里地割との関係も想定される。

掘立柱建物跡は、第１・４・５号掘立柱建物跡が特に建物や柱穴の規模が大きく、注目される。第１号掘立柱建物跡は建物構造は明確でないものの、少なくとも庇を持つ構造である。身舎は床束を持つ可能性があり、仏堂や有力者の居宅であることが推定される。ただし、仏具等の遺物が出土していない点は注意すべきである。

第４・５号掘立柱建物跡は南北に並立しており、第４号掘立柱建物跡からは炭化米、第５号掘立柱建物跡からは柱根が出土した。炭化米はＰ３上部からの出土で、遺構群が滞水する悪条件下での検出である。検出状況からは、必ずしも第４号掘立柱建物跡が倉庫であったことを示すことはできないと思われる。しかし、周辺に稲倉があったことは確実であろう。なお、第４・５号掘立柱建物跡の東部は、本来調査区外であったものを広げ、平面プランのみを確認したものである。第４号掘立柱建物跡の東部には、本建物跡に伴わないとみられる柱穴が存在しており、更なる掘立柱建物跡があるものと思われる。

溝については、古代のものと中世のものがある。古代のものは第３号溝で、覆土の状況から第５号溝もそれに帰属すると思われる。中世のものは第１・２号溝であり、第１号溝は複数の溝が累積したものである。第２号溝はＬ字に曲がり、南側を区画する溝と思われる。第１号火葬墓が区画内に位置しており、関連する可能性がある。また、覆土の状況から、第４号溝、第１号溜井状遺構、第１・２号土坑が中世のものと思われる。第１・２号土坑は井戸跡の可能性がある。第１号溜井状遺構と同様に、溜井としての性格が考えられる。

前述したように、花小路遺跡は旧石器時代から弥生時代まで遺物が散見され、生活の痕跡を見出すことができるが、古墳時代から奈良時代は、遺構・遺物が全く確認されなかった。ローム上に黒色土が発達し、遺構がその中で確認されるのは、こうした開発の空白が関係しているのだろうか。同じような開発の状況と黒色土の発達は、南東約1.2kmの深谷城跡でも認められる。共に台地の先端部に位置しており、周辺には古墳時代の遺跡が少ない。古代という枠の中では、開発が遅れる地域と認識できる。

花小路遺跡は、９世紀中葉或いは後半～10世紀前半にかけて建物群が営まれ、その後、中世にかけては水田化していたものと思われる。掘立柱建物群の中には庇や床束を持つもの、炭化米が出土したもの、直径約30cmの柱根が出土したものなどがあり、また柱穴の掘方も規模が大きく、通常の集落の枠内では考えにくい。有力者の居宅である可能性が最も高いと思われる。遺跡の出現時期は９世紀中葉或いは後半であり、律令体制が揺らいでいく過程にある。こうした中で新興勢力が興ってくるのであり、花小路遺跡を営んだ人々は、新興富裕層であった可能性が指摘できよう。やがて生活域は南へと移り、これまでの生活域は水田化していくものと思われる。第２号溝及びそれにより区画される南方は中世の遺構と思われ、館の存在が想定される。

最後に改めて、これらのこの発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた社会福祉法人彩の国ふかや福祉会や近隣住民の方々を始め、花小路遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

付編１　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫・
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・佐々木由香・新山雅広

１．はじめに

深谷市花小路遺跡より検出された試料２点について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。試料調整は、山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani が、測定は小林、丹生、伊藤が行い、本文は佐々木、伊藤が作成した。また新山が種実同定と、記載、写真撮影を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報、調整データは表１のとおりである。試料の１点目（PLD - 5987）は焼失した倉庫と考えられている掘立柱建物跡 SB - 4 の柱穴（P3）内から採取した土壌をフローテーション法により回収した中から出土した炭化イネ胚乳である（写真１）。P3 内からは炭化イネ胚乳が大量に出土し、そのうち１点を測定試料とした。

２点目（PLD - 5988）は、掘立柱建物跡 SB5 の P3 に遺存していた柱材（樹種は未同定）である。柱材は本来芯持丸木であったと思われるが、現況では心材が欠損し、辺材が部分的に遺存していた。樹皮は遺存していないが、柱穴の幅に対する柱材の幅から、測定試料は最外年輪近くと考えられる。これらが出土した遺構の年代は出土遺物から９世紀後半から 10 世紀後半と考えられている。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5987	遺構：SB4 遺物 No：P3	試料の種類：炭化イネ胚乳 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5988	遺構：SB5 遺物 No：P3	試料の種類：生試料・材 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

３．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行った ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)
			1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲	
PLD-5987	-24.55 ± 0.11	1150 ± 20	870AD(26.5%)900AD 915AD(41.7%)965AD	780AD(2.0%)790AD 800AD(93.4%)970AD	1149 ± 19
PLD-5988	-25.71 ± 0.13	1240 ± 20	690AD(42.8%)750AD 760AD(25.4%)810AD	680AD(95.4%)870AD	1239 ± 20

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

４．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

SB4 の P3 から出土した炭化イネ胚乳（PLD - 5987）は、^{14}C 年代で 1150 ± 20yrBP で、1 σ暦年代範囲では 915 -965calAD（41.7%）、870-900calAD（26.5%）、2 σ暦年代範囲では 800-970calAD（93.4%）の年代範囲を示した。1 σでは 10 世紀前葉から 10 世紀中頃の年代範囲の確率が高く、2 σでは、９世紀初頭から 10 世紀後葉である確率が高かった。考古学的にはイネ胚乳は倉庫に備蓄されていた食料であることが考えられており、測定試料の年代は、イネを収穫した年代、すなわち倉庫の機能していた年代を示すと考えられる。

SB5 の P3 から出土した柱材（PLD-5988）は、^{14}C 年代で 1240 ± 20yrBP で、1 σ暦年代範囲では 690-750calAD（42.8 %）、760 - 810calAD（25.4%）、2 σ暦年代範囲では 680 - 870calAD（95.4%）の年代範囲を示した。1 σでは７世紀末から８世紀中葉の確率が高く、2 σでは、７世紀後葉から９世紀後葉の年代値を示した。得られた ^{14}C 年代値では柱材はイネ胚乳より約 100 年古い値となったが、暦年較正を行うと、この時期の暦年較正曲線がやや平坦な様相を示すことから、いずれも幅広い暦年代範囲となった。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425 - 430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355 - 363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代 , 3 - 20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029 - 1058.

写真１　年代測定試料（炭化イネ胚乳）
スケールは１mm

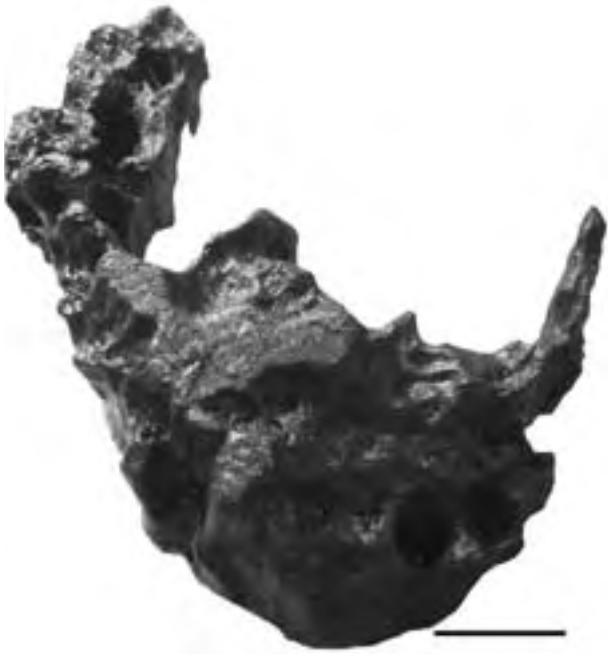
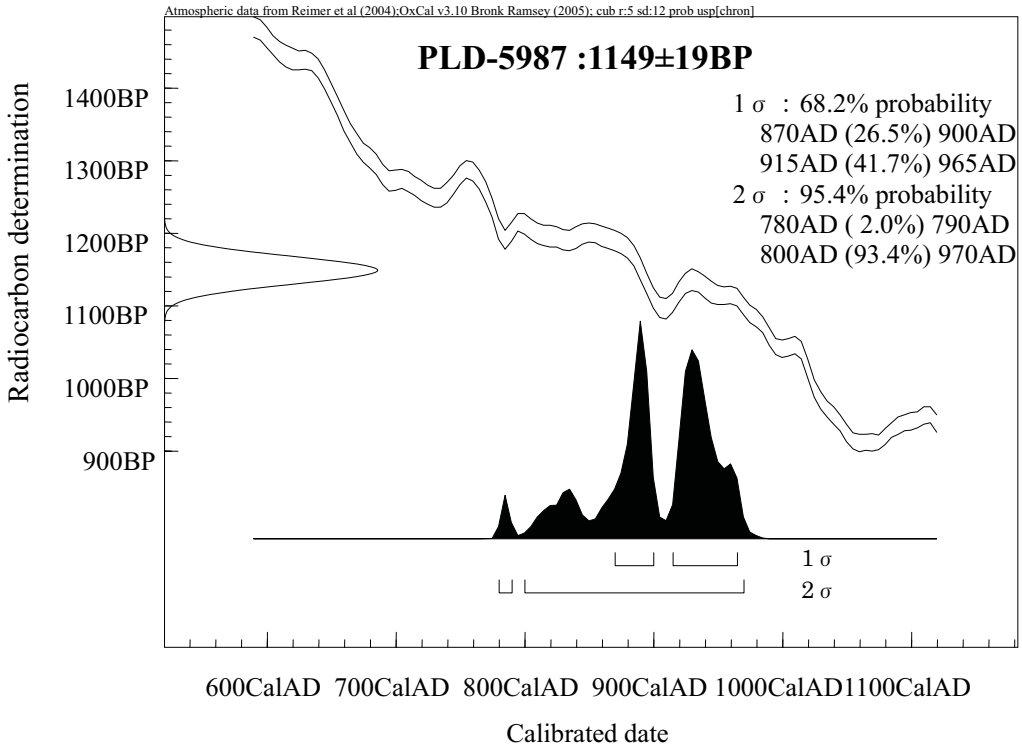


写真２　年代測定試料（柱材）
スケール５cm


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-5987 :1149±19BP
1σ : 68.2% probability
870AD (26.5%) 900AD
915AD (41.7%) 965AD
2σ : 95.4% probability
780AD (2.0%) 790AD
800AD (93.4%) 970AD
Radiocarbon determination
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
1σ
2σ
600CalAD 700CalAD 800CalAD 900CalAD 1000CalAD1100CalAD
Calibrated date

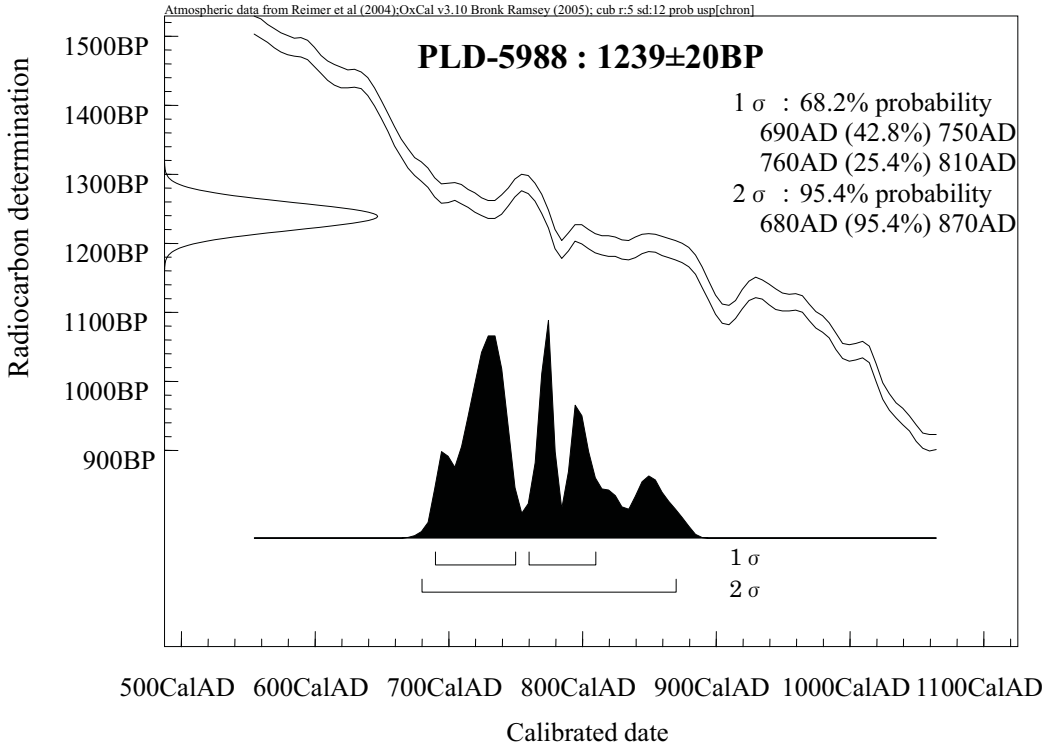

Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-5988 : 1239±20BP
1σ : 68.2% probability
690AD (42.8%) 750AD
760AD (25.4%) 810AD
2σ : 95.4% probability
680AD (95.4%) 870AD
Radiocarbon determination
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
900BP
1σ
2σ
500CalAD 600CalAD 700CalAD 800CalAD 900CalAD 1000CalAD 1100CalAD
Calibrated date

図１　暦年較正結果

付編２　深谷市花小路遺跡より出土した柱材の樹種

鈴木伸哉（早稲田大学）・能城修一（森林総合研究所）

はじめに

深谷市花小路遺跡より、平安時代（９世紀後半～ 10 世紀前半）に比定される掘立柱建物跡が出土した。このうち、SB - 1 と SB - 5 から出土した柱材の樹種を同定した。

資料と方法

樹種同定は木材切片のプレパラート観察によりおこなった。木製品から採取した木材切片をガムクロラールで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートには FHK001 - 003 の標本番号を付した。それらは出土資料とともに深谷市教育委員会によって保管されている。

結果

プレパラート 3 点のうち、コナラ属クヌギ節が 1 点、クリが 2 点であった（表 1）。これらの標本の木材解剖学的な記載をおこない、顕微鏡写真を図版 1 に示し、同定の根拠を明らかにする。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus* sect. *Cerris*　ブナ科（写真 1: SB - 1 P5 [FHK001] ）

早材部に大道管が 1 ～ 3 列並び、晩材部では厚壁で小型の単独道管が放射状または火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列の小型のものと、大型の集合状 - 複合状のものとからなる。

クヌギ節にはクヌギ *Quercus acutissima* Carruthers ととアベマキ *Quercus variabilis* Blume があり、福島県以南、四国・九州の山地に多い。クヌギに比べアベマキのほうが暖帯に寄った分布をする。

クリ　*Castanea crenata* Siebold *et* Zucc.　ブナ科（写真 2: SB - 1 P9 [FHK002] ; 3: SB - 5 P3 [FHK003] ）

ごく大型で丸い道管が年輪のはじめに 1 - 3 列ほど並んで孔圏をなし、晩材では小型で薄壁の道管が火炎状に配列する環孔材。早材から晩材への移行は緩やか。木部柔細胞は短接線状で、晩材で著しい。道管の穿孔は単一。放射組織は単列同性。

近隣の熊谷市北島遺跡では、8 - 9 世紀の掘立柱建物跡の柱材にクリが多く用いられており（鈴木・能城 , 1989; パリノ･サーヴェイ株式会社 , 1998)、また本庄市大久保山遺跡では、11 世紀の住居の構築材にクヌギ節を多用した例（パリノ・サーヴェイ株式会社 , 1996）があるなど、本遺跡における例とも矛盾しないが、時期や地域、建築物の種類によって用材に差異があることも考えられる。

引用文献

鈴木三男・能城修一 . 1989. 掘立柱建物検出柱材の樹種 .「北島遺跡（第 9・10・11 地点）スポーツ文化公園用地内埋蔵文化財調査報告書（II)」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 88 集 . 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 . 148 - 149.

パリノ・サーヴェイ株式会社 . 1996. IIIB 地区の住居址から出土した炭化材の樹種 .「大久保山 IV」. 早稲田大学本庄校地文化財調査報告 4.（早稲田大学本庄校地文化財調査室 , 編）. 早稲田大学 . 305 - 309.

パリノ・サーヴェイ株式会社 . 1998. 北島遺跡の古環境変遷 .「北島遺跡 IV 上之調節池建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告 < 第 2 分冊 >」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 195 集 . 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 . 485 - 503.

表１　深谷市花小路遺跡より出土した柱材の樹種

遺構番号	部位	樹種	図	標本番号
SB-1	P5	コナラ属クヌギ節	５図	FHK001
SB-1	P9	クリ	５図	FHK002
SB-5	P3	クリ	13 図	FHK003

写 真 図 版

図版１

第１号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡

図版２

第５号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡Ｐ３

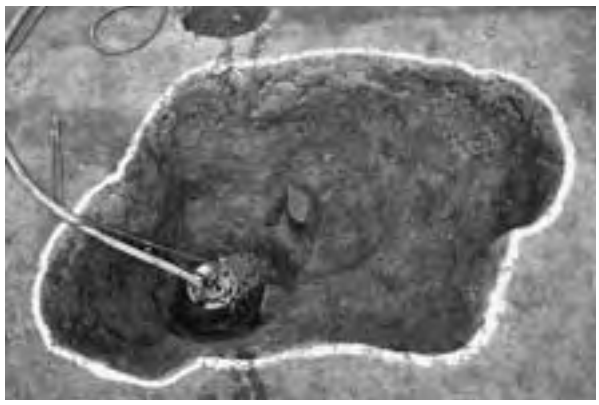
第１・３号溝

図版３

第１号掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡Ｐ１

第１号掘立柱建物跡Ｐ２



第１号掘立柱建物跡Ｐ３

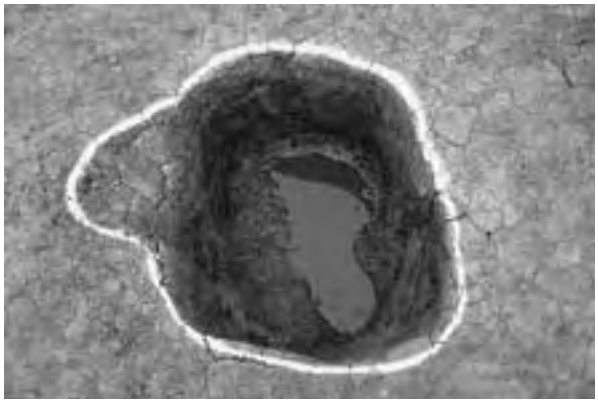
第１号掘立柱建物跡Ｐ４

第１号掘立柱建物跡Ｐ７

第１号掘立柱建物跡Ｐ８

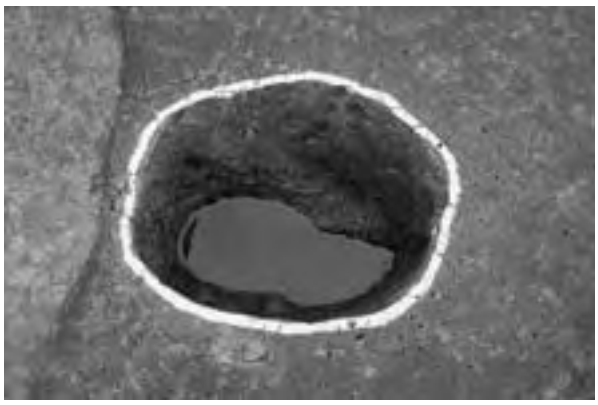
第２号掘立柱建物跡

図版４



第３号掘立柱建物跡Ｐ４

第３号掘立柱建物跡Ｐ５



第３号掘立柱建物跡Ｐ６

第４号掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡Ｐ１

第５号掘立柱建物跡Ｐ２

第５号掘立柱建物跡Ｐ３柱根

第１号竪穴建物跡

図版５

第２号竪穴建物跡

第３号竪穴建物跡

第４号竪穴建物跡

第５号竪穴建物跡

第６号竪穴建物跡（１）

第６号竪穴建物跡（2）

第６号竪穴建物跡カマド

第６号竪穴建物跡、第３号溝

図版６

第１号溝（１）

第１号溝（２）

第２号溝

第３号溝

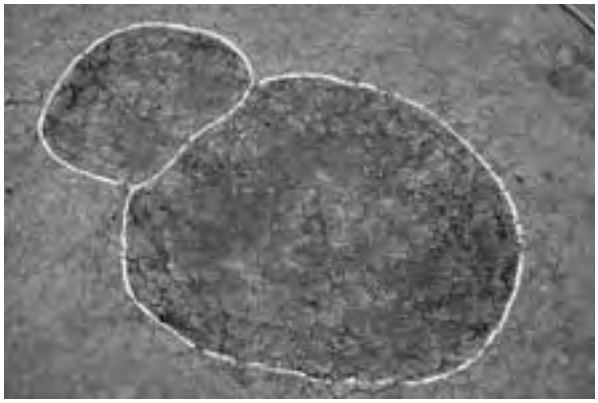
第２・３号溝

第１号溜井状遺構（１）

第１号溜井状遺構（２）

第２号土坑

図版７



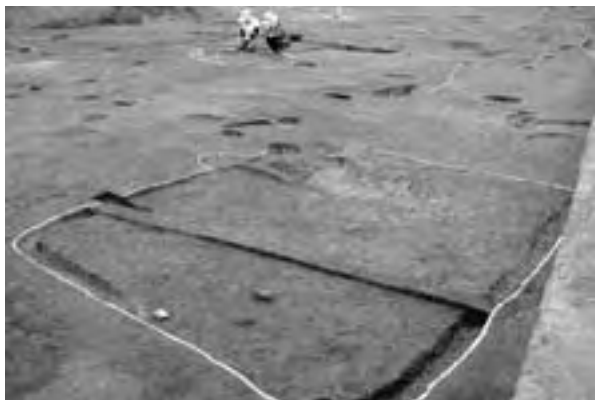
第３・４号土坑

第５号土坑

第１号火葬墓

調査風景（１）

調査風景（２）



調査風景（３）

第４図１

第４図２

第４図６

図版８

縄文・弥生土器

第 14 図３（ＳＢ１）

第 14 図４（ＳＢ１）

第 14 図５（ＳＢ１）

第 14 図９（ＳＢ１）

第 14 図 16（ＳＢ４）

第 14 図 17（ＳＢ５）

第 21 図８（ＳＪ４）

第 21 図２（ＳＪ２）

第 29 図１（調査区）

第 28 図２（１号火葬墓）

第 29 図３（調査区）

ＳＢ５Ｐ３柱根

第１号掘立柱建物跡出土遺物

第２・４号掘立柱建物跡出土遺物

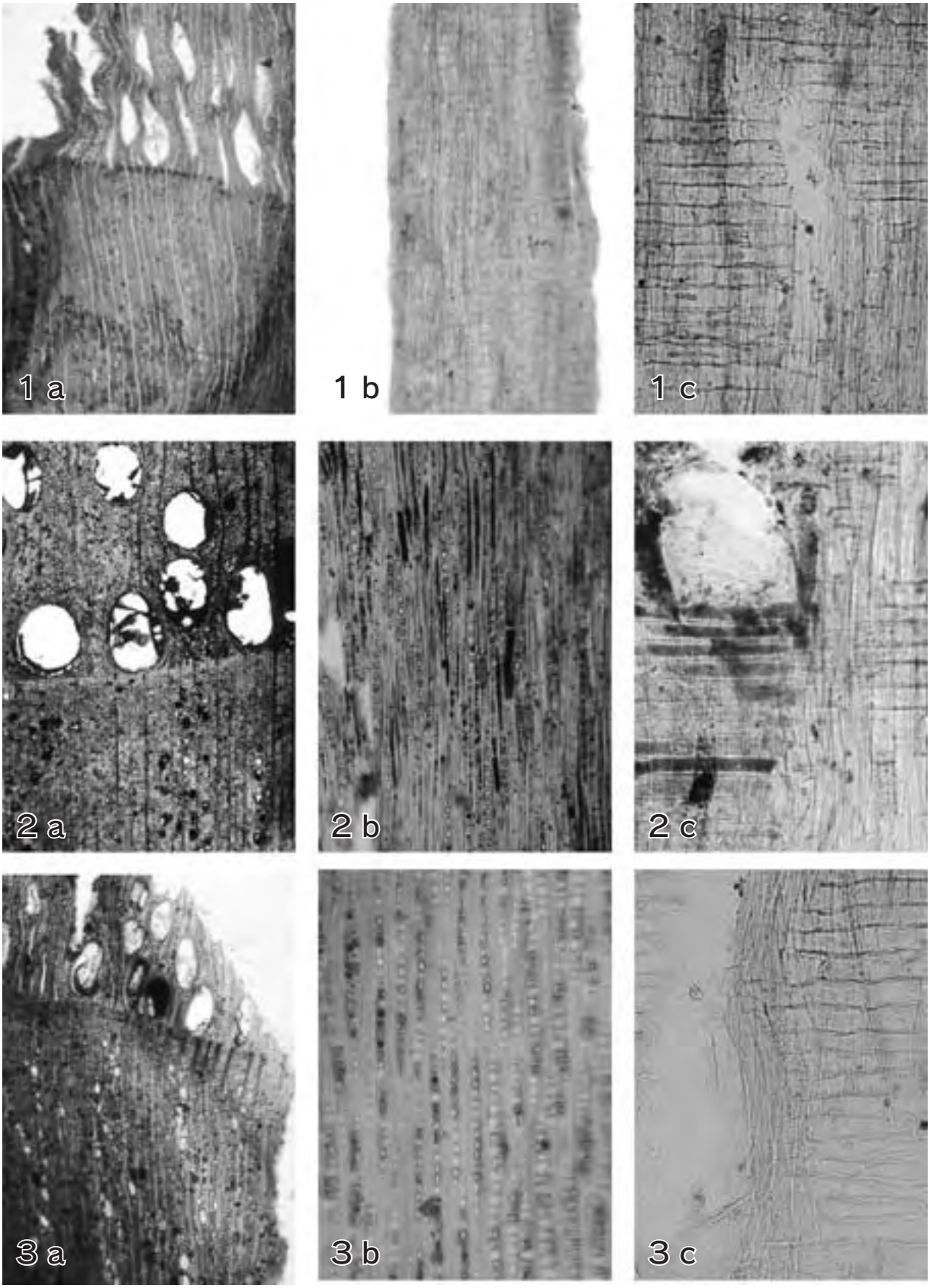
第２・４号竪穴建物跡出土遺物

第５・６号竪穴建物跡出土遺物

土坑・溝出土遺物

調査区出土遺物

付編２図版１



深谷市花小路遺跡出土柱材の顕微鏡写真．
1a-c: コナラ属クヌギ節 (FHK001), 2a-c: クリ (FHK002), 3a-c: クリ (FHK003), a: 横断面 x40, b: 接線断面 x100, c: 放射断面 x200

報告書抄録

ふりがな	はなこうじいせき
書名	花小路遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	知久裕昭
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366－0823　埼玉県深谷市本住町17－3　　TEL　048－572－9581
発行年月日	2008(平成20)年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査 期間	調査 面積	調査 原因
花小路遺跡 (はなこうじいせき)	深谷市西大沼 (ふかやしにしおおぬま) 字花小路 (あざはなこうじ) 44-1,-4,-5	11218	154	36　12　18	139　16　27	20060406 ～ 20060531	800㎡	児童養護施設建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花小路遺跡	集落跡	平安 中世	掘立柱建物跡　５棟 竪穴建物跡　６棟 土坑　９基 火葬墓　１基 溝　５条 溜井状遺構　１条	旧石器 縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 灰釉陶器 中世陶器 青磁	庇付掘立柱建物跡を含む平安時代の建物群を確認。

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第101集

花　小　路　遺　跡

印　刷　　平成20年３月26日
発　行　　平成20年３月31日

発　行　　埼 玉 県 深 谷 市 教 育 委 員 会